

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和七年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第九号（通卷二八五号）

万象

B A N S Y O

十二月号

2025.12



十二月の句

激震地枯野にゆがむ方位石

石田野武男

激しい地震の揺れで、枯野に立つ方位石がゆがんでしまっているという景を詠んでいる。

「正常な状態を失った方位石は、人々の心に深い不安や喪失感が広がっているということを暗示している。自然の力の前では人間の築いた物や秩序がいかに脆いか。野武男は地元紙のコラム欄「北風南風」を長く執筆し、その原稿をまとめた「かはひらこ」を出版した。「かはひらこ」は蝶の古名で、川をひらひら飛ぶ様子からきている。「春夏秋冬の季節の中に姿を変えて限らない空間の一点を嫺やかに飛ぶ存在に惹かれた」と、あとがきに記されている。「万象敦賀句会」での野武男の笑顔が浮かぶ。

―句集「方位石」より―

(中村 優)

令和七年

十二月号

万象

BANSYO

美しいものを見ると
生きるちからがわいてくるよね

谷川俊太郎

万 象

令和7年12月号

主宰作品 松の露 江見悦子 4

万象の窓④ 「日々新たに生きる」 江見悦子 5

名誉顧問作品 無 月 小林愛子 6

風音集

中村千久・福島せいぎ・柳澤宗正・中條睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中愛子
榎本文代・神田美穂子・井村和子・前田貴美子

風音散歩③⑦ (十二月号) 小林愛子 10

同人作品

江見悦子選 11

同人作品の佳句 江見悦子選 31

同人会だより

俳縁 谷渡末枝 32

10月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく⑥⑦ 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞(十月号) 亀田やす子 34

同人特別作品

しぐるる 喜多尾明子 36

登呂遺跡 本多ひとみ 37

特別作品評(十月号) 荻野加壽子 38

私のこの一句	大橋 雅子・塩井 志津・田中 道江・広瀬 俊雄	39
北から南から	天明鑄物のふる里(栃木)	島田 和枝
句集鑑賞	小林愛子第三句集『くれのおも』	江見 悦子・橋本 清・中村 千久
	福島せいぎ・中條 睦子・榎本 文代	前田貴美子・岡本 敬子・山本とく江
	高橋 ひろ・砂地 宏子	編 集 部
続・風のしをり ^{②④}	子規の写生論の展開(一)	高木良多	48
万葉の抒情 ^{②⑥}	『万葉集』にたずねる抒情の源流 ^{②⑧}	橋本 清
万象ノオト「駅」	山本 瑤子・久保田富士子・中嶋 久登	50
	菅原 雅子・佐々木 茂・松永 博子	
万象作品	江見悦子選	52
万象作品の佳句	江見 悦子	62
句会一覽	64
万象この一年	大木 茂	67
新中央句会報(9月例会)	70
薄荷飴日月譚	はればれと冬の噴水吹かれをり	中村 千久
ルビーの小函(十二月号)	75
東西南北	76

松の露

江見悦子

(主宰)

秋彼岸幽霊坂を上りつめ
青柿の転がる友の墓所
在祭黒松の根にけつまづき
小さき嘘重ねしひと日曼珠沙華
五十年古りし庖丁藪を切る
送稿のPC閉づる露の夜
寝足らひし朝こぼるる松の露

「日々新たに生きる」

江 見 悦 子

10月6日、7日と相次いで、日本の科学者お二人のノーベル賞受賞の報が流れました。生理学・医学賞の坂口志文さん、化学賞の北川進さん。受賞理由について記す能力はありませんが、どちらも人類を救う発展に役立つ、何十年にもわたる研究が認められてのことでした。この夏の猛暑、それにつぐ残暑でくたびれている日本社会が喜びに沸き立った大きなニュースでした。お二人の受賞の言葉を興味深く聞きました。

坂口志文さん（子供たちに向けて）

世の中には面白い事、興味をそそることが沢山ある。興味を持ち続けて色々な試みをしていくと、社会とつながり、気が付いたら「面白い境地」に達し「自分の世界」を作ることが出来る。北川進さん（次世代に向けて）

興味を持って挑戦する姿勢、ビジョンが必要だ。「幸運は準備された心に宿る パスツール」… 幸運は人生の様々な経験や出会いを大切にすることで巡ってくるものだ。

「興味」「持続」「挑戦」そして「出会いの大切さ」、お二人の言葉は驚くほど似ています。

「万象」には90歳を越える現役の会員、同人が20数名、毎月欠かさず投句が届きます。最高齢98歳は横浜の西本才子さん。95歳の小林愛子先生のご活躍はご存じの通りです。金沢の今越みち子さんはお嬢さんの成瀬真紀子さんと、柏の山本とく江さんはお嬢さんの穂刈照子さんと、一緒に俳句を楽しまれています。

坂口さん、北川さんの言葉を借りるまでもなく、興味を持って持続し、挑戦し、「自分の世界・自分の俳句」を作りあげて来られた先輩の皆さんの姿に敬服しています。

綾子先生の「同じ日は二つとは決して来ない。明日は違う日が来る」という言葉は、「幸運は準備された心に宿る」に通います。「日々新たに生きる」ことで老いをも楽しみ、他でもない「自身の俳句」を生み出せるよう、心を耕したいものです。

無月

小林愛子

(名譽顧問)

空風呂の奈落蠅虎とべり
鳴く蟬の下枝をいだく蟬の殻
鬼気迫る健啖あはれ獺祭忌
星飛んで夫の逝きたる月日かな
流れゆく秋雲のほか何も見ず
老人の道に突つ立ち九月尽
洗ひ髪タオルで包む無月かな

竹の春

中村千久
(編集人)

竹の春野宮ののみやに旧る黒鳥居
雲映し風わたりゆく花野かな
さやけしや漢方薬に龍の文字
龍淵りゅうえんに潜み漢方匂ふ夜
秋草あきくさを引けばゲール銃の弾
莫児モルヒネ比涅ヒネを欲る妻かなし雁の頃

得度の日

福島せいぎ
(顧問)

ほろほろと鳴く小鳥来る得度の日
爽やかや五体投地の指反らす
月食の夜のしじまを虫すだく
齒を抜きて口が空つぽ秋の風
竹夫人くびれしところ強く抱く
落花生ころもの帯をこぼれけり

家仕舞

柳澤宗正
(顧問)

檀林の名残の寺門曼珠沙華
颯爽と障害越ゆる秋の馬
生き残るはらから思ふ夜長かな
山城の址踏み分けて茸狩
独りごち鎌振る農婦秋深し
家仕舞出来ぬふるさと柿熟るる

夜長

中條睦子
(同人会会長)

明日のため半襟掛くる夜長かな
葬送の風をまとひて萩白し
僧侶には遺影のあらず虫の秋
弔問の手話しみじみと秋の風
夫のもの一枚羽織り吾が夜長
間引き菜や水笑はせて土落とす

萩は実には

松原智津子

(北海道)

秋来れば思ひ出奈良の寺巡り
松林抜くる細道そぞろ寒
石狩湾望む山荘小鳥来る
苔覆ふ石垣に垂れ萩は実には
そそくさと一人の昼餉秋寂びぬ

蘆の花

亀田やす子

(栃木)

街に響く運動会のアナウンス
やはらかき日差しゆらゆら蘆の花
藪に潜む鳥の声する寒露かな
日時計の遅々たる影や秋の空
初鴨の毛繕ひの毛吐き出せり

新松子

沢辺たけし

(千葉)

馬追の草よりあをき翅とよむ
手賀沼の水面ささくれ葛嵐
城跡の麓に竹の稲架を組む
新松子二輛電車は海に沿ひ
枝に掛けし囹籠より羽搏つ音

一滴

吉中愛子

(東京)

大山の水ごと掬ふ新豆腐
薄墨の雲ひと日負ふ蕎麦の花
里芋のねばりの強さ最上ぶり
糸瓜の水落つる一滴待ちちるたり
また同じ子規の本買ふ鶏頭花

残る虫 榎本文代

(神奈川)

手にとりて夕日のぬくみ烏瓜
秋祭稻荷の森に灯の揺るる
新米の粥をふうふう離乳食
秋風やしづかに蝶の重なりぬ
踏み込めぬ草の深きに残る虫

秋 燕 神田美穂子

(静岡)

秋燕や大河のつなぐ甲斐駿河
律の風織部の皿の深みどり
身に入むや生薬匂ふ小抽斗
新涼や鎖骨の美しき十六歳
天仰ぐ信楽狸豊の秋

星月夜 井村和子

(石川)

相思樹の並木に小鳥渡り来る
星月夜猓に食はれし旅の夢
桐一葉夫の命日近づきて
古代米一ト匙加へ茸飯
予後の身をひとり愛しむ夜の秋

青 酢 橘 前田貴美子

(沖縄)

海風の白極まれり酔芙蓉
つくろひの糸のからまり草の花
秋麗へ膝を流して土鈴振る
みほとりのことばしづくや青酢橘
夕景の句も重ねあふ秋扇

風音散歩

③7

(十二月号)

小林愛子

葬送の風をまとひて萩白し 中條睦子

萩は初秋のころ可憐な花をひらき、中秋のころ散りこぼれる。詩歌に読まれ、山上憶良が、秋の花の代表として七草を数え、筆頭に萩の花を上げて以来日本人に愛されてきた。

句はまさに葬送の儀が始まろうとしている。同時発表の句の(僧侶には遺影のあらず虫の秋)にはつと息を呑む想い、作者の御亭主と拝察する。折からの秋風に白萩は白さを増幅させ、旅立ちを送る哀悼の思いは頂点に達するのである。

律の風織部の皿の深みどり 神田美穂子

句にある「律」とは日本音楽で音程を示す単位。I単位は西洋音楽の半音に当たり、オクターブは12音、十二律とも。それは六律六呂に別れ、律を陰(秋)呂を陽(春)とした。「律の風」とは秋らしい趣のある風、という意味である。

句は「織部」の皿に見惚れている。斬新な意匠と鮮やかな色彩は織部の命、折からの「律の風」がいかにも相応しい。

そそくさと一人の昼餉秋寂びぬ 松原智津子

秋も深まって辺りはものさびしくなってきた。ところで独り身の女性はどんな昼食をとっているのだろう。よるべは無

いが束縛されない自由はある。年齢や個人の生き方によって一律とはいかないから面白い。句は「そそくさ」とあわただしい。几帳面な作者に急用でも入ったのであろうか。

つくるひの糸のからまり草の花 前田貴美子

「草の花」は名のある草の花も、名もないような野の草の花もこめて言う。可憐で寂しい花が多く、種類も多い。

句は、衣類などの繕い物であろうか、柔らかな日当たりの縁などが思い浮かぶ。「糸のからまり」は膝のあたりに付き纏う糸屑であり、草の花にこぼれた糸との趣でもある。

踏み込めぬ草の深きに残る虫 榎本文代

俳句での「虫」は秋に鳴くキリギリス科とコオロギ科の虫を総称している。「残る虫」は「すがれ虫」ともいい秋も深まった頃、衰えた声で鳴いている虫のこと。実際は初冬の吟にもあらわれる表現で、冬の虫に併記した歳時記もある。句は、か細く鳴く虫の声。「踏み込めぬ草の深き」に晩秋のあわれさと、なかに鳴く虫の生に対する懸命さである。

古代米一ト匙加へ茸飯 井村和子

昨今は、年中茸が売られているが、秋はやはり格別である。松茸を初め天然の茸の勢ぞろいに、平凡な日常も茸飯などで賑わう。同時発表に(桐一葉夫の命日近づきて)があり、古代米も加えてみる。赤米、黒米などは古代日本で食されてきた米、色づいた茸飯に夫との楽しい日々がよみがえる。

同人作品

江見悦子選



札幌 岡本敬子

きつぱりと空気変はりぬ今朝の秋
むらさきのけふの深さよ式部の実
火櫛の瓶のつるうめもどきかな
オホーツクの秋刀魚脂の透きとほる
抱瓶に野にあるやうに草の花

札幌 林陽子

朝涼や新聞受けに軽き音
ランナーの背へ涼風と声援と
日照雨きて色鮮やかに菊の庭
稜線に沿うて群れなすいわし雲
庖丁に種の吸ひ付くオクラかな

札幌 落合裕子

里山を隠す狭霧や朝まだき
新涼や雨の上がりし葬の朝
花びらに折目の残る紅芙蓉
底紅や二日続けて友の夢
枝振りの頭になりし松手入

札幌 濱谷和代

海鳴りの激しくなりぬ実はまなす

はる楡のざわつく葉擦れ夏の果
取り忘れ曲り胡瓜の朝な朝な
大平原銀の雫は朝の露
灯明の絶えぬ菩提寺こぼれ萩

札幌 大内和憲

刈り伏せの野菊はやくも枯れの色
蝦夷の地の風の唸りを秋の蝶
朝冷や触れても開かぬ自動ドア
まぢかともはるかとも声小鳥来る
首折りて丈まつたうす大向日葵

札幌 紅露恵子

街路樹に蔓を這はせて牽牛花
稲の秋遙かに青き駒ヶ岳
長き夜の折鶴ひとつ書に挿む
実玫瑰燃ゆる夕日に融けさうに
花蕎麦の浮き立つ白さ夕まぐれ

札幌 大内マキ子

星月夜湖底に青き魚ねむり
鮭一本吊し番屋の灯がともり
秋時雨牧舎に馬の吐息かな

馬屋閉ぢて昏れゆく牧の星明り
異邦人と片言交り新酒酌む

札幌 中鉢弘一

虹の彩ひととき浮かぶたまり水
北窓に早き落日秋の暮
風の道稻穂の波の崩れをり
初秋刀魚一尾を妻と分け合うて
豊の秋駅のホームの輓馬像

札幌 北浦詩子

下校時のカーブミラーに大西日
箸置きは白き折鶴原爆忌
表情に出さぬ腹立ち扇子置く
鉈を手に男の出番大南瓜
窓越しにくうと鳴く犬秋夕焼

江別 佐藤哲

大南瓜正面に据ゑ収穫祭
鮭さばく儀式のごとくかまへたり
魚籠軽し今宵無月の酒に酔ふ
新米の香り手くほに掬ひけり
活けられて日匂ひけり秋の草

江別 太田 佳美

平和乞ふ小学生の原爆忌
女衆腰を落として盆踊
盆の月計報の続くひと日かな
隠れ家てふカフエにあふるる実紫
月食の進むを見入る白露かな

新潟 高橋 ひろ

秋彼岸傘さしかけて香点す
虫鳴くや夜になりきれば風生まれ
ちちろ鳴く伏せ重ねある植木鉢
赤とんぼつういとひとつ飛び放れ
謎なぞの解けぬ大婆敬老日

新潟 高野 松風

だしぬけに翔つ雉鳩の音涼し
水みくじ大吉色なき風の中
墓守が会釈返せり百日紅
参道に蹴つまづくなり銀杏の実
願かけて回す狛犬木賊垣
色かへぬ松や明治のなまこ壁

益子 光岡 れい子

明けそむる小風は秋の匂ひして
芋の露朝日集めてころがれり
牛飼の角笛の音夏惜しむ
大いなる櫛の風の涼新た
機関車の発車の汽笛天高し

芳賀 大村 かし子

新涼や鎌びかびかに外流し
久久に七輪に焼く初秋刀魚
尻まるき味一番の名残茄子
断捨離の袋三つ四つ秋暑し
五千株のコキア紅葉の休耕田

宇都宮 阿久津 勝利

無住寺の軒の雨音秋はじめ
竹林の葉擦れの嵯峨野涼しけれ
かなかなや鳴きて入り日を早めける
橋脚にぶつかり割るる秋出水
鬼やんま翅を光らせホバリング

栃木 上岡 佳子

朝霧の土手銀輪の疾走す

秋燕の渡良瀬川を飛び交へり
早稲の香やふる里の橋渡りける
渡良瀬川の流れ平らや厄日過ぎ
対岸の暁の梵鐘秋気澄む

佐野 増田 幸子

筑波嶺を隠す狭霧や船溜り
船窓にしぶくや浦の秋の雨
台風のニユース刻々塩むすび
ファックスを待ちをり蚊遣香点けて
つづれさせ日記にけふのこと三つ

佐野 加藤 季代

かなかなや雨後の里山澄みたる
秋の暮ぼつりぼつりと映灯り
木犀の金の花屑なほ匂ふ
望月や川白々と野を分かち
億光年の光を蔵し星涼し

佐野 阿部 澄

誕生日うすむらさきの薔薇活けて
蘆の花赤耳亀の首立つる
山門に草鞋六尺天高し

爽やかや時計回りに雑魚の群
四阿に男大の字風は秋

佐野 芝宮留美子

蜩の声しらじらと明けにけり
秋澄むやむらさき色の花多き
初嵐棧橋出づる帆曳船
読みかへす句集に付箋虫時雨
朱の美しき巴水の版画秋澄めり

佐野 島田 和枝
※巴水：川瀬巴水（浮世絵師）

石榴の実雨の雫を留めをり
化粧水日焼の顔にたつぷりと
夫の臥す窓より満月あかあかと
芒原さはさはと風生まれたり
花野ゆく雲湧く稜線仰ぎつつ

佐野 売野 緑

葛の花のぼり切つたる電波塔
夕の風秋蒔の畝立てにけり
今朝秋の月蝕光り戻しけり
廃屋も蔵も隠せり真葛原
稗を抜く若き農夫や夕の風

佐野 店 網 洋 子

ひつじ雲風のままなる稲穂波
あさがほの蔓を解きをり夕の風
オレンジの満月雲の棚引きて
石畳に零るる白のさるすべり
編棒も棺に納む菊の花

足利 大 木 茂

白山に白雲一朶秋澄めり
大根蒔く夜は大粒の雨となり
百舌猛る俱利伽羅峠登り口
金泥の墨蹟擦れ秋扇
秋あかね石瓦葺く武家屋敷

土浦 澤 照 枝

草の実の飛ぶ通学路轍荒れ
秋気澄む林蔵生家開け放ち
小貝川堰の淀に石たたき
山裾の日のつめたさや秋茄子
更待やベランダに椅子一つ置き

加須 茂 木 弘 子

陸揚げのマスと林立秋天へ

秋光や昼のマリーナ閑散と
畦の鷺秋の入り日に背を向けて
夕づきて筑波山の峰は霧のなか
帆曳船見に來し浦は秋時雨

さいま 山 本 右 近

一滴を蛇口はなさぬ秋暑かな
暮れかねて火照る露座仏底紅忌
小流れの石揺れてゐる水の秋
羅漢寺の畑に艶よき秋茄子
白湯掬ふ錆朱の匙や西鶴忌

所沢 三 好 か ほ る

秋燕陣屋の空をひるがへり
傷のなき全き桃を描きをり
稲藁に吊るすさるほば秋祭
「ピカドン」の話いく度生身魂
桃一つ九谷の皿に綾子の忌

所沢 南 雲 秀 子

色付きし稲穂の彼方八高線
溪流に足浸しゐる敬老日
ポスト迄コスモスの咲く畑よぎり

稻刈の済む田に休む大鵬
降水帯伴ひ来る秋の雷

千葉 田中 道江

「戦中戦後」語る会果つつくつくし
さはやかや「老いの集ひ」へ装ひて
秋澄めり耳元近くチャルダツシユ
露草や雄蕊の黄色ありてこそ
きらめきて雲ながれゆく賢治の忌

千葉 松浦 陵保

秋蟬や恋の合唱ひたすらに
金秋やサイクリングの軽やかさ
妖艶な両手の仕草盆踊
葛の花穂先「し」の字に曲がりたる
険閉ぢ波音探す今朝の秋

千葉 喜多 恭仁子

大夕焼大屋根リング包みけり
「反省」の言葉も虚し敗戦忌
白露の夜「六甲おろし」の大合唱
秋出水マンホールの蓋踊らせて
伝へたる免許返納墓洗ふ

千葉 大月 玲子

秋水の漲るばかり最上川
秋簾綻び易き紐一本
残る蚊に弄ばるる座禅かな
長き夜や母に静かな息づかひ
短冊の反古捨てられぬ瀬祭忌

佐倉 大内 佐奈枝

出水あと芥絡める穂草の根
花上げて流れてゆきぬ布袋草
山門に僧の糧なる稲架ひとつ
切売りの西瓜で足りる暮しかな
巻きて散る木槿はけふを終はりたり

佐倉 三屋 英俊

風にはか盆棚に魂来たるらし
四五杓の水墓の辺の野菊にも
蠟涙の上に蠟涙八月尽
おもかげを色なき風に偲びけり
しなふ手は寄する白波島をどり
秋出水舟で届ける見舞酒

佐倉 横川 良子

秋日差羅漢に残る日の温み
大鍋で冬瓜を煮る夜の厨
沼尻に芥を寄せて秋出水
稲刈りて視界広がる遠筑波
秋時雨参道の店早仕舞

四街道 奥 太雅

きつちりと閉ぢて零るや花木楳
秋の蚊に喰はれし耳の火照りかな
堰堤を吹き上げらる赤とんぼ
谷川の水音幽か水引草
拍手の一つで発たす稲雀

四街道 塗木 翠雲

赤らめる稲穂啄む土鳩かな
雨を乞ふ祭太鼓を滅多打つ
盆三日良太百句を口遊む
風倒の稲穂の向きのばらんばらん
水の秋鯉の息吐く水輪かな

船橋 山下 良江

夏空へ大しやち飛ばす水しぶき

大しやちの真夏の海を一回転

葉先より雨の雫や朴青葉
なだらかに稲穂垂れたる棚田かな
山裾へすべり行くかに稲穂揺れ

船橋 赤堀 洋子

一列に縦隊組んで彼岸花
きりぎりす朝の通りへ声張つて
空き店舗めだかの鉢の残されて
きりぎりす脚を止めれば鳴き止みて
白雲と百日白の白競ふ

船橋 久保村 淑子

北上川の逆波立てる残暑かな
東西に走る川筋虫時雨
水細り魚影の消ゆる秋の川
映画館出で本降りの秋の雨
とんぼうや疎水と川を繋ぐ橋

船橋 片桐 帆一

残照の穂先弧を描く猫じやらし
秋草や蓼科の里巡り来て
かへり見る碓氷峠を鳥渡る

紙箱に百円玉置きさつまいも
空耳に別れの声やつづれさせ

船橋 宮本加津代

口数のめつぼう減りし残暑かな
味付けは塩を振るのみ豊の秋
一睡のあとの夜長をもてあます
コスモスの花真つ盛り空まさを
ひと雨に洗はれし青秋の空

船橋 中嶋久登

妣秘伝塩丸いかの盆の膳
夏の井戸柄杓二杯の誘ひ水
噛み切れぬフランスパンの残暑かな
剝ぎ取られ棒となりたる案山子かな
鶏小屋の餌箱ひたす秋出水

柏 山本とく江

長命水汲む境内や稲穂の香
秋旱池の底まで鱗走る
稲架掛けの束不揃ひの学校田
病む夫をホームに見舞ふ敬老日
静かさや蜻蛉の打てる水の音

月蝕の果てたる月の涼しけれ

柏 内田郁代

鶏頭はまだ幼しよ綾子の忌
農小屋の前に二畝藍の花
土手つなぎ立木をつなぐ真葛原
稔り田の真中往還貫けり
新米と言へど夫には柔く炊く

柏 古川京子

コンサート終はればひとり早星
みんみや城址のベンチに日記書く
きつぱりと山雨さりたり白鳥座
転がる岩貼りつく岩やちんぐるま
峰雲のくづるる空の青さかな

流山 穂苅照子

大西瓜光る原爆供養塔
終戦日振子時計を直したり
こんがりと焼けて蒲の穂爆ぜにけり
あんパンの舌に貼り付く子規忌かな
曼珠沙華ぼつんと影を深めたり

東京 名 和 政 代

オムライス半分にして上り月
会津塗の漆の匂ひ秋彼岸
山の日の翳りては照る秋桜
噴煙の流るる彼方まで芒
靴紐の結び目ほどく秋の暮

東京 藤 田 裕 子

先導は馬上の巫女や秋祭
台風過の夜空ひろびろ皆既食
振り向けば主なほ立つ月の門
胸ひろげ絵身に月を浴びにけり
爽やかに朝のコーヒー日曜日

東京 島 野 ひ さ

焼秋刀魚辛み大根たつぷりと
台風過綿雲ひとつ流れけり
骨折の右手や梨はまるかじり
泥つきの淡いピンクの新生姜
箱植ゑの茄子に水やる楽しみよ

東京 加 賀 葉 子

ふれたればくづれんばかり京の柿

粒ごとに光を撥ぬるずすこかな
山並の青紫や罽雲

墓石の字ていねいに拭き秋彼岸
かなかなや墓地の柘植の木小さく刈り

東京 久 留 島 規 子

川筋を辿れば秋の夜風かな
処暑なればシャリの小さき握りかな
行きずりに交す言葉も残暑かな
倍速で雲の飛ぶ翔ぶ野分晴
藍に染む空にはじまる月の蝕

東京 下 嶽 孝 一

おにぎりを大きく結ぶ終戦日
ソーダ水またねと言ひて半世紀
不器用な十指なりけり胡瓜もみ
霧走る山ふところの磨崖仏
いつぱしの闘志なほあり枯蟻螂

東京 草 間 三 香 子

ねこじやらし男繕ふ獅子頭
境内の子安観音小鳥来る
廃校の錆び付く鉄扉ことり来る

ゆつたりと荒川を越え鱒雲
瘤梨と云ふ真ん丸や里の梨

東京 岡村 純子

藍皿に残る秋刀魚の骨美しき
眩しげに大樹を仰ぐ秋日傘
子を抱へ三叉路急ぐ野分かな
曖昧に風に揺れをり縞芒
たをやかな風に添ひゆく大花野

東京 桑原 優美子

新米のふはりと握る塩むすび
秋灯や本屋に満つる活字の香
秋風やシヨートカットの襟足に
血縁のまた一人欠け墓洗ふ
朝顔の花ほめあひて路地暮し

東京 小池 清晴

語らぬも語るも奈落終戦日
流灯に平和と大書波高し
蟬の声途絶えて残る翅一枚
直売のU字L字の胡瓜かな
糠床に収まりきらぬはぐら瓜

東京 一由久美子

語り継ぐ少年の声原爆忌
あさがほに深むらさきの風かすか
おしやべりの弾みて風の猫じやらし
草むらの闇深くなる月の蝕
釣柿の廂明るき尼の家

武蔵野 砂地 宏子

海の色秘めて黒黒秋刀魚の目
わつしよいの声遠くより秋の風
朝日影金を帯びたる糸のこ草
線香の燃え殻一つ秋彼岸
おしろいの実でままごとの化粧かな

立川 正田 華子

虫すだくつひの栖は団地かな
鶏頭の路ゆづり合ふ乳母車
秋の雷太き一発それかぎり
稲熟るる古墳の裾の一枚田
廃屋に這ひ上りたり蔦紅葉

町田 広瀬 俊雄

道端にかがやき小さき鏡草

萩咲くや勝頼妻女自刃の塔
山城の虎口をせばむ水引草
真夜中の皆既月食虫すだく
ブロッコリーの苗の小さきに虫ひとつ

町田 桔 梗

純

桜木の切株被ひ秋桜
薄紅の芙蓉朝日へ華やげり
橡の実のテニスボールに似て重し
葛の花散り敷く道のほのかな香
友よりの梨ずつしりと手に余り

日野 喜多尾 明子

街路樹の影のやはらぎ秋はじめ
ついと寄りついと離るるやんまかな
秋茄子母の訛を子の真似て
ビル裏の一枚の田の稔りかな
秋霖や歩きたがらぬ犬を連れ

横浜 西 本 才 子

藁塚の 一列山へ傾ける
お薬師の山裾に沿ひ刈田道
橋桁に鷺羽繕ふ秋の川

野分晴沖に巨船の動かざる
夏木立栗鼠かるやかに枝移る

横浜 大 橋 雅 子

秋の色寄木細工のペンダント
噴煙の谷を見下ろす秋日和
赤とんぼ山路に硫黄匂ひくる
霧晴れてスワンボートの動き出し
病む友に便りしたたむ秋灯下

横浜 山 崎 郁 子

青みかん挽げば青々香りたる
脚一つ失くせしばつた庭を飛ぶ
名を呼べばひまはり畑の笑顔かな
やき鳥の列に並べる夏真昼
昼飯はポテトサラダに麦酒添へ

横浜 田 賀 椽 恵

遠山の群青色や秋の朝
恙無しと便り届きぬ秋日和
昨夜の雨含み白萩しだれ咲く
雨粒の残る竿先大やんま
空瓶に野菊いつぱい駐在所

横浜 星野 信子

かなかなや鍵の外れし農具小屋
風そよぐ二百十日の草の色
はつあきや三日月眉の薬剂師
敬老日集ふ翁はサユリスト
秋祭焼そばを焼く腕太し

川崎 大久保 進

ほろ酔ひに並ぶバス停処暑の月
四の五のと会議長々地虫鳴く
生かされて術後の鼓動鶏頭花
仕舞湯を落として終ふる厄日かな
地酒酌む手馴れし妻の裂臈

鎌倉 恒川 清爾

黙禱で始まる盆の同窓会
新豆腐名水てふを貰ひ来て
草相撲弁当箱は力士並み
名月やたらふく食べし郷の飯
秋灯や父の遺影のセピア色

伊勢原 佐藤 和子

子規庵の朽ちし濡れ縁秋海棠

姉白寿丁寧に剝く熟れ葡萄
青紫蘇のか細き花にしじみ蝶
老大工早仕舞する厄日かな
夕明り帰燕の空となりにけり

静岡 大村 峰子

きちきちに家覗かれて独りなり
畑とも径ともつかず花茗荷
色無き風回覧板を後ろ手に
寝転びて離れ涼しき在所かな
共同井の隅に麦茶の薬缶かな
冬瓜汁届く鍋底ぬくきまま

静岡 海野 みち子

老鶯や村の先祖の墓あたり
夏霧の湖面這ひ来る早さかな
十葉の星のごと咲く母の墓
蜻蛉の群れて遊べり句碑の空
白挽く手母に重ねて夜なべせし

静岡 宮崎 知恵美

広島忌父は十五で被爆者に
墓に来て塩辛とんぼ水叩く

掘り立ての馬鈴薯土の匂ひけり
松茸飯客のおかはり三杯目
秋茄子や百円市の大袋

静岡 望月 敏男

蹲踞に脱ぎ捨てられし蛇の衣
風鈴や渡り廊下の風の道
その上へその上へ垂れ夏柳
教室の鯰と会ひし登校日
完封のクラブ叩くや雲の峰

静岡 藤原千代子

ラジオより演歌秋刀魚の腸焦がす
踏台にけつまづきたる秋暑かな
開拓の畑や黍の穂ふさふさと
白蛇めく新幹線や真葛原
紺色の全き富士や台風過

静岡 荻野加壽子

狗尾草風と親しくしてをりぬ

静岡 小川 明美

稲の花遺跡の畦を鋤かつぎ
発掘の弥生の琴の音さやか
化粧品売場を巡る秋扇
秋めきてデパートに買ふルージュかな
処暑なれど社の砂利の照り返し

静岡 藤本 節子

虫送り火屑消しゆく消防士
雲の峰田んぼの亀裂深々と
正座して痺れじんじん秋暑し
新涼やのんど潤す井戸の水
早稲の香や背を抜けたる夕の風

静岡 大長 文昭

堰の石ひとつ外して水盗む
曝涼や唐の螺鈿の五弦琵琶
肌を刺す日の沸騰す敗戦日
枝豆や待ちに待つたる雨の音
禅堂に雲水の喝残暑かな

静岡 加山ひさ子

猫じやらし手に手に揺らし下校の子
終戦日湯気の白飯山盛りに
二百十日堤防高き大井川
十団子を取り替ふる軒秋涼し
虫送り闇の中なるひとつ村

静岡 石川裕子

夕の鐘色深めたる酔芙蓉
ぱつくりと靴底剥れ厄日かな
流れ去る電光ニュース台風禍
雨靴に隠れてちちろ高調子
小鳥来る子の繰り返すみすゞの詩

静岡 本多ひとみ
※みすゞ……金子みすゞ (詩人)

農小屋の壁に動かぬかまどうま
天高しビルの谷間の一九の碑
新涼や万葉歌碑の草の径
夕暮の街を旋回椋鳥の群
松原に下弦の月の琥珀色

静岡 杉澤修

谷空へ御詠歌をのせ風は秋

石を積むだけの仏や草の絮
ほろほろとつまくれなるのこぼす紅
禊場へ九月の水の奔りけり
田の闇へ火の粉を沈め虫供養

射水 成瀬真紀子

秋の海砕けて長き波の舌
白亜紀を掘り少年の夏終はる
爽籟や歩きたさうな夫の靴
スマホ見る君よ花野に顔上げよ
水の秋かたまつてゆく鯉の稚魚

金沢 今越みち子

蕎麦を食ぶ外一面の蕎麦の花
宿場町忙しく回る芋水車
天狗面の鼻の長短秋祭
錦着る布袋の山車や村を練る
能登沖に太き竜巻盂蘭盆会

金沢 伊藤美音子

吊橋を渡るときめき合歡の花
読めぬ字にてこずり麦茶ひといきに
校庭の砂巻きあぐる大旱

蕎麦咲いて風の眩しき一揆村
糺祭忌電池切れたる血圧計

金沢 高田たみ子

備蓄米ほどよく炊けて涼新た
冷まじや堰をのみ込む暴れ川
つつましく白萩の咲く別れかな
恙なく暮るる一日や秋刀魚焼く
綾子忌や日ごとふくらむ酔芙蓉

金沢 豊田高子

水牛を洗ふメコンの大落暉
忌を修す事も余生や白芙蓉
呑み足りし赤子のうす目秋うらら
鏡花忌を音なく暮るる流れかな
少年の大志は一途青みかん

金沢 松井佐枝子

天窓を鴉のありく秋暑かな
大花野雲奔る影くつきりと
夢洲^{ゆめしよ}や二百二十日の人溢れ
香を焚く店先鉢の吾亦紅
薄闇の曜変天目秋澄めり

金沢 石川純子
萩揺るる白猫ひよいと振り向けり
声残し雀散り散り初嵐

貫ひ風隣の席の秋扇
去り難き地蔵の並ぶ萩の寺
古民家の風吹く庭に女郎花

金沢 河野尚子

あどけなき笑顔の遺影終戦忌
湧水の砂踊らせて岩魚かな
池底をさざ波の影晩夏光
秋の穂高揺らし吊橋渡りたり
糸とんぼ水草の上に身をゆだね

金沢 道場啓子

先づ鉄研ぐ祖母のこと盂蘭盆会
駐在所跡地に殖ゆる秋桜
虫しぐれポケットにメモ忍ばせて
乱れ書きの句帳読み解く虫の夜
隣家より鈴^{りん}の音処暑の昼下り

金沢 杉本年虹
売れ残る秋の金魚を一袋

護摩焚きの炎さかるや鶏頭花
秋うららお寶頭盧さん艶艶と
さやけしや剃り跡青き盆の窪
夏暁の嶺の茜や純子の忌

金沢 南 恵 子

神殿へ蠅の潜む径を避け
どの畑も猿除けの柵盆の道
一本は仮齒のままや夏果つる
乳児室に鳴るオルゴール涼新た
庭師らに追ひ払はれて穴まどひ

金沢 松 下 信 子

行き合ひの空や散り継ぐ百日紅
七半の立つる爆音秋暑し
線香の煙青々秋澄めり
悪なれどその艶美しき油虫
颯雲風の野末を列車行く
鍵盤を叩くだけの子葡萄好き

金沢 北 川 禮 子

かなかなや地震に倒れし一路句碑
赤多き地獄絵図掛け盆の寺

※一路……千田一路(石川県の人)

更地多き能登の行く末虫時雨
遺骨なき戦死の兄の墓洗ふ
秋の海鬻の匂ふ町を抜け

金沢 清水英理子

また一つ分校閉鎖草の花
達筆の父の手帳や盆の月
古民家の帯戸全開早稲香る
秋高し列車乗り継ぐ一人旅
秋澄むや一刀彫の觀世音

七尾 谷 渡 末 枝

利鎌研ぐ二百十日の水に研ぐ
むかご飯夫婦の会話頓珍漢
沼田刈りかんじきの緒の泥まみれ
獣害の田に火を放つ秋の暮
秋声や爪切る膝に顎のせて

白山 加藤美栄子

老い何ぞダンサー秋天蹴り上ぐる
爽やかや湯に繭おどる山の朝
一山を足裏で支へ葉掘る
発つ人の白露の朝を振り向かず

夜もふけて杣人廻すましら酒

敦賀 倉谷ます美

神殿に祝詞の充ちて涼新た
立て膝で昆布搔く音花カンナ
熊野筆なじむ硯を洗ひけり
朝顔や川門へ出でて米をとぐ
蛇神の老樹へ卵盆の月

敦賀 鶴田勝子

涼新た薄墨はしる一茶の書
手漕ぎ舟の水脈に揺れるる蘆の花
白秋や絵馬堂に立つ潮の香
嫁ぎ来し青き項や牽牛花
足るを知る二人の暮し秋茄子
朝採りの茶にすがり来しばつたの子

敦賀 中川雅月

達筆の俳師の笑顔緋のカンナ
手話交はす若き夫婦や涼新た
鉢植ゑの朝顔名残の一花かな
裏木戸の溝萩垂れ椅子一つ
流灯の行きつ戻りつ読経果つ

敦賀 中村 優

水に落つふたつみつと秋螢
会釈され思ひ出せず秋彼岸
放棄田の腰掛け石や盆の月
葛の花蔓に蔓巻き起ち上がる
父の忌や白布を掛けし籐の椅子

敦賀 為永香月枝

腹話術に語るピカドン原爆忌
長崎の鐘きく木椅子原爆忌
古古古米新米の棚独り占め
父の事又聞く妹や盆の月
願ひ文流す社の水澄めり

徳島 福島吉美

骨切りのリズム軽やか鯉捌く
寺町の崩れし土塀夏あざみ
村分つ溝に溢るる蓼の花
湧き水のすべる岩肌合歓咲けり
築山の蟬街へ飛ぶ夕鴉

徳島 村上和義

冲遙か入道雲の立ち上がる

神苑の大樹を揺らす蟬しぐれ
街の子も山の子もゐて海開き
塾終へて急ぐ家路の虫時雨
一合で足りる新米炊きにけり

徳島 宮西 修 一

自転車を押して残暑のアンダーパス
しなやかな指先揃ふ阿波踊
カンナ咲く無人駅舎となりにけり
とんぼうの交尾びて水面叩きをり
分限者の家は壊されゑのこ草

徳島 平岡 功

手筒花火の粉小躍りしてゐたり
花火果て夜空に星を返したり
余生なほ遊び心や鳳仙花
白粉花の匂ひ夕闇深めをり
隠沼の静寂一喝秋の雷

石井 木内 マヤ

犬は牙残して逝けり夏の果
亡き犬の寝姿探す萩の庭
秋風や犬の寝床の朽ちゆける

泣き顔を見られぬやうにカシオペア
金色とも黄色とも見え赤とんぼ

小笠原 岡田 あゆみ

帰省子に珈琲豆の封を切る
サンダルの並ぶ砂浜夏休み
海亀の甲羅をさする都会の子
揚花火突堤に見るパジャマの子
ややあつて闇に轟く大花火

福岡 宮田 千恵子

終戦日八十年目の空は蒼
能面の口のお齒黒蟬時雨
値引き札差し替へてをり大西日
蒲焼の鰻仏と分け合へり
ひた走るキャンピングカー雲の峰

長崎 丸本 祥夫

静脈の浮きいづる母花金柑
絡みゐる基地のフェンスの鉄線花
干瓢を干すや振れを直しては
青鷺の片脚折りて小半時
上流へ鎌首あげて青大将

西海 山下 敦子

初秋は風車の羽根の先端に
芭蕉葉の疵も破れもなきままに
それぞれの好みに焦がし秋刀魚焼く
でこぼこの道に影濃き秋夕焼
海に日の入る一瞬や信夫の忌

※信夫……折口信夫(国文学者・歌人)
宮崎 中山

宣

稲の花に見とれてバスの通りすぎ
糸瓜忌や瀬祭といふ酒を酌む
独り居や夫の声なき台風裡
黒潮の蛇行台風のろのろと
新涼夫人院や鋏を入れる夫の髪

宮崎 中山 芳教

折箱の祝ひは駄菓子敬老日
百選の棚田燃え立つ曼珠沙華
閑道や焰めく緋の葉鶏頭
空広し病臥の窓に罽雲
泰然と病舎の庭の葉鶏頭
サーファアの波間に消えて罽雲

宮崎 鳥居 達史

稲架の立つ山田小さく暮れぬたり
罽はしる土間のへつつひちちろ鳴く
田の神の住み古る祠虫の闇
ふるさとの紫尾山むらさきに鶴渡る

那覇 中 本

清

身に入むやトランペットの祝ひ唄
雨筋を縫うて気ままな秋燕
長老の付け髭ぬらす菊の酒
新北ミューニシ風や山羊汁届く上棟式
巻貝の歩く白砂月の雲

西原 宮 城

勉

夜は夜の岩雲据ゑて処暑の島
六代のその先知らず門火焚く
花街の娼家が先祖絵灯籠
缶詰の梨の半割れちちろ鳴く
初期化とはいいかぬ人生黄落期
色鳥や藍糸洗ふ水使ひ
糸干せば高鳴き交す帰燕かな
長靴に二百十日の土踏まず

豊見城 渡真利 真澄

朝雨や瑠璃色著き茄子畑
片蔭となる裏口のパイプ椅子

ベルシ 鈴 木 波 江

裏道を抜けて橋まで秋日和
体低く傾げて見上ぐ窓の月
水甕かつぐ女人の像や雁渡る
飛ばしたる猫の砂掃きそぞろ寒
秋寒し猫の首根に手指入れ

〈お詫びと訂正〉

10月号に誤りがありました。お詫びして訂正致します。

P 56上段13行目

(誤) 辺戸名の森

(正) 辺土名の森

P 56上最終行の句

(誤) 秋霖や安須森けぶる句碑の辺に

(正) 春霖や安須森けぶる句碑の辺に

P 27下段の鶴田勝子様の句

(誤) 大瑠璃をぬりつぶしたる海夕焼

(正) 大瑠璃をぬりつぶしたる海夕焼

2025年 12月号

月刊俳句界

毎月25日発売
定価1000円(税込)

推薦! 注目・期待する
俳人



◎近作12句とエッセイ

神野紗希 西村麒麟 小川軽舟

岸本尚毅 細谷暁々 三宅やよい

川嶋ぼんだ 堀切克洋 伊藤幹哲

土井探花 中西亮太

「クラブ」俳句界NOW 能村研三

特集 季語への託し方

○季語の包容力 涼野海音

○季語への託し方 山本一步

しなだしん 大西朋 杉山久子

なつはづき 阪西敦子 若杉朋哉

隔月連載 相子智恵

若手句集 抜井諒一

を讀む 最終回 堀田季何

(司会) 井上泰至

セレクション結社「阿蘇」山下しげ人

『注目句集』高橋健文『一本の權』

「俳句界」投稿欄 一流選者10名!
充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

同人作品の佳句

江見悦子選

鈍を手に男の出番大南瓜
水みくじ大吉色なき風の中
朱の美しき巴水の版画秋澄めり
蠟涙の上には蠟涙八月尽
静かさや蜻蛉の打てる水の音
あんパンの舌に貼り付く子規忌かな
不器用な十指なりけり胡瓜もみ
草むらの闇深くなる月の蝕
冬瓜汁届く鍋底ぬくきまま
曝涼や唐の螺鈿の五弦琵琶
白亜紀を掘り少年の夏終はる
鍵盤を叩くだけの子葡萄好き
蛇神の老樹へ卵盆の月
花火果て夜空に星を返したり
夜は夜の岩雲据ゑて処暑の鳥

北浦詩子
高野松風
芝宮留美子
三屋英俊
山本とく江
穂苺照子
下嶽孝一
一由久美子
大村峰子
大長文昭
成瀬真紀子
松下信子
倉谷ます美
平岡 功
宮城 勉

同人会だより

俳縁

谷渡末枝

然したる思いもなく、気が付けば半世紀近く「俳句」と付き合っている。

俳誌「風」に初めて投句した当時は、1500名近くの会員の句が一句欄にびっしりと載っていた。

目を皿のようにしてその中に自分の句と名前を見つけた時、大袈裟かもしれないが、周りには句友も居らず、句会など聞いたことのない田舎者に、妙な自信が芽生え今までにない世界観を意識した。

人前で自分の名前をはっきりと言えるようになったことも、俳句をやってきたお蔭だと信じている。

素晴らしきかな「俳句との関わりは人との出会い」。

かつてわが町を挙げて俳句大会を開催した折には、多くの俳句仲間に手伝ってもらった。はるばる関東方面からも多数参加して頂き、あの時の感動は忘れられない。

全国の俳句仲間との交わりは、ある時は結社を超えた付き合いになることもあり、思いもよらず多彩な方々との出会いは夢のようで、交流は今も続いている。

たくさんのお出合いを大切に、俳句を楽しみ、広く活動したならば、素晴らしい「俳縁」が生まれると思う。

気さくで「能登には行くよ！ 必ず行くよ！」と何度も言っただけの故内海良太師との、これまでの繋がりも深い「俳縁」による賜物として、感謝している。

10月の「万象」オンライン同人会句会高点句

- 10 立山は北斎の藍秋澄みぬ 成瀬真紀子(射水)
- 9 海峡の風の渦巻く鷹柱 村上和義(徳島)
- 7 丸めたる反故のつぶやく良夜かな 神田美穂子(静岡)
- 7 銀漢や語れば尽きぬ能登風土記 谷渡末枝(七尾)
- 6 間引菜や水笑はせて土落とす 中條睦子(金沢)
- 5 鳥渡る安房の蛭屋の夕灯り 三屋英俊(佐倉)
- 4 鈴懸の鬼面と化する落葉かな 松浦陵保(千葉)
- 4 寧^な楽は秋古りし薬舗に箱階段 中村千久(志木)
- 4 夫の物一枚羽織り我が夜長 中條睦子(金沢)
- 3 ひとところ眺むゴリラの秋思かな 北浦詩子(札幌)
- 3 一合で足りる新米炊きにけり 村上和義(徳島)
- 3 莫^{モル}児^ヒ比^ヒ涅^ネを欲る妻かなし雁の頃 中村千久(志木)
- 3 とどまるも流るる雲も秋彼岸 紅露恵子(札幌)
- 3 黒文字のゆるりとしづむ栗鹿の子 清水英理子(金沢)
- 3 忍者出て来さうな土塀からす瓜 南恵子(金沢)
- 3 鶉色の雲に弓張月透けて 芝宮留美子(佐野)
- 3 はきはきと答える少女背みかん 岡村純子(東京)

(*句頭の数字は点数を示しています)



珈琲ぶれいく⑥7

今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に火偏または火の部の漢字を入れましょう。

- | | | | | |
|----|--------------|----------|--------|------|
| 1 | ちらく | と陽 | 立ちぬ猫の墓 | 夏目漱石 |
| 2 | 芭蕉忌の | の芯剪る坊が妻 | 高濱虚子 | |
| 3 | ところてん | のごとく沈みをり | 日野草城 | |
| 4 | 塩田夫日 | け極まり青ざめぬ | 沢木欣一 | |
| 5 | 足袋あぶる能登の七尾の駅 | 細見綾子 | | |
| 6 | 白き手の病者ばかりの落葉 | 石田波郷 | | |
| 7 | 青衣童女われによりそひ流 | 山口青邨 | | |
| 8 | ご開帳おん身 | 傷の新羅仏 | 内海良太 | |
| 9 | 帰りやんせ秋夕 | の広がりぬ | 飛高隆夫 | |
| 10 | 学問のさびしさに堪へ | をつぐ | 山口誓子 | |
| 11 | 大櫓をかへせば裏は一面 | 高野素十 | | |
| 12 | 雨欲しき日となりにけり原 | 角川春樹 | | |

【正解】

- | | |
|----|---|
| 1 | 炎 |
| 2 | 燭 |
| 3 | 煙 |
| 4 | 焼 |
| 5 | 火 |
| 6 | 焚 |
| 7 | 燈 |
| 8 | 火 |
| 9 | 焼 |
| 10 | 炭 |
| 11 | 火 |
| 12 | 爆 |

おいしい俳句

第10回 嵐山光三郎

雉子食ふや外の暗黒締切つて 橋本多佳子

雉子を食べたことがある。小学校五年生のころ、伯父に連れられて近くの山に入った。雉子は日本特有の鳥で、一九四七年に国鳥に指定された。猟期は十一月から翌年二月までの四ヶ月間だ。雄は暗緑色で、上胸と尾は紫色である。雌は全身淡紅色で黒い斑文がある。伯父は樹の裏側に隠れて坐り、空気銃一発で撃ちとつた。駆けよつて雉子の内臓と血をぬいた。雉子といえば桃太郎で、犬、猿、雉子が子分だった。捕えてすぐは肉臭が強く、肉質も硬いから、五日後に焼いて食べた。

多佳子は東京、本郷生まれ。昭和十年(三十六歳)、誓子に師事した。「雉子齧きしところにその香とどこほる」「雉子料るつめたき水に刃をぬらし」「つよき香の雉子食ふいのち延ばすとて」とそのときの記憶を句にのこした。多佳子は十二歳で肋膜炎を患い、十九歳のときにはチフスにかかり、晩年にはたびたび心臓発作をおこしたので、雉子を食べる体力を強くしようとした。

多佳子の句は良家の奥様の「目がくらむようなシーン」がエロティックだ。「髪洗ひ生き得たる身がしづくする」(六十二歳のときの句)が鮮烈なる代表句です。

公社団法人俳人協会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(十月号)

亀田やす子

右肩に触れて茅の輪のにはびたつ 林 陽子

名越の大祇に参拝した時の句である。氏子等が茅葺を集めて作った「茅の輪」を想像した。作者は本殿に一礼し、左から右へと八の字に廻り、右に廻ったとき右肩が茅の輪に触れて青い匂がした。五感を働かせ、触覚・嗅覚で感じ取ったの即興句。句材は意外なところにあるものである。

橋桁に届く中州の茂りかな 北浦 詩子

猛暑続きのこの夏、空き地のどこも雑草が伸び放題。作者はいつも渡っている橋の景観の変化に気付き足を止めた。橋桁に届くほど草が伸びている。川の縁まで草が蔓延り、川幅を狭めている。今年も線状降水帯が発生している。いつ大雨がやって来るか分からないと、草の茂りを心配して見ている姿が浮かぶ。

沼渡る蛇ひと筋の水脈残し 大木 茂

沼辺の散策であるうか。偶然に水面を泳いでいる蛇の姿を目にしたのである。蛇特有のくねくねした動きではなく、一本の棒のような泳ぎだったのだらう。「ひと筋の水脈残し」の描写に、水面をすべるように泳いで岸に消えた蛇の後ろの水面の情景がよく表されている。

九輪草山の冷気をまとひけり 三好かほる

九輪草は庭園や庭先などで見かけるが、この句は山間の湿地に自生している九輪草のようだ。直立した太い茎の上に、さくら草に似た花を咲かせている。山の冷たい空気をしっかりと捉え「冷気まとひ」と表現し、気品のある九輪草の凛とした美しさを詠んでいる。

月下美人間の無音へひらきそむ 田 中道江

丹精を込めて育てた月下美人。待ちに待った開花である。夜の帳につつまれる頃、月下美人のつぼみが膨らみはじめた。「闇の無音へ」の描写。暗く音の無い空間に開いた、真っ白く大きな花の神秘的な美しさに酔いしれたことだらう。一夜にして萎んでしまう命の短さが残念である。

首出して貫頭衣めくサンドレス 大内 佐奈枝

「貫頭衣」は、広辞苑によると「原始的、基本的は衣服」とある。それに似ているという「サンドレス」は、危険な暑さの続く夏にはうれしい衣服。作者のお手製だらうか。着るも脱ぐも簡単に風通しが良い。女性が身につける一番涼しい服である。「首出して」の表現がサンドレスにぴったり。

雨音を弾き返せり朴青葉 山下 良江

朴の木は公園や広いところに高々と立っている。掲句は、作者が朴の木の近くで雨宿りをしているときの景だらうか。「雨音を弾き返せり」としっかりした朴の葉を打つ雨の様子を良く捉えて、一気に詠んだところにリズムがある。飛驒地方の郷土料理である朴葉味噌を思い出した。

真夏日や朝一番の映画館 久留島規子

この夏は「国宝」という映画が公開されて人気を呼んだ。40度近くの気温の中の外出は危険な状態。こんな時こそ映画館で過ごすのも一考であった。「朝一番の映画館」に羨ましさを感じた。ニュースでも取り上げていた評判の良い美しい映画に、気持もリフレッシュされたに違いない。

祭足袋こはぜはづしてひと眠り 下嶽孝一

作者の住むところの年中行事の夏祭のようだ。上五の「祭足袋」の名詞止めに祭の情景が浮かんだ。朝から法被を身に着けた作者は祭の中へ……。途中、火照る足を休めに家に戻り「ひと眠り」といったところであろうか。「こはぜはづして」が具体的に、夏祭に携わることの大変さが伝わる。

ぼつちやりの素足の並ぶ乳母車 砂地宏子

若葉の緑が美しい公園を散歩中なのか。木陰で出会ったのはベビーカーではなく四輪の乳母車である。ちよつと声を掛けて覗き見ると、まだ座れない幼子が二人並んでいる。ふつくと羽二重餅のような素足がある。口を突いて出たことばが「ぼつちやり」だった。このオノマトベが可愛らしい。

大仏の切れ長の目の涼しさよ 佐藤和子

仏像はいろいろな目をしている。半眼もあれが怒りの目などもある。この句の大仏は修学旅行の定番コースである鎌倉大仏であろう。夏の日に訪れて大きな阿弥陀如来の切れ長の美しい目を見て、「涼しさよ」と捉えたのである。どこから拝見しても穏やかな大仏様である。

たわい無き話弾めりソーダ水 加山ひさ子

様々な用事に追われて日々を過ごしていると、ほつとひと息つきたくなる。暑さ凌ぎに気の合う友人と息抜きにカフェへというところだろう。爽やかな「ソーダ水」を注文し、たわい無い話が途切れなく続き、時間はあつという間に過ぎたのだ。季語のソーダ水が動かない。

落日の光一条夏至の海 成瀬真紀子

日本海の水平線に、濃いオレンジ色の夕日が火の玉となって刻々と沈む、そんな落日である。海原に長々と放たれた日の光を「光一条」と捉え、自然のなす一本の光の帯が作者の近くまで寄って来た。落日のあと夏夕暮の時間は長い。「夏至の海」をしばし楽しんだことだろう。

拉致ありし入江白鷺佇めり 北川禮子

日本海沿岸各地で起きた拉致事件については長年案じている。被害者や家族を思うと胸が痛む。掲句は、入江で遠くを見据えている一羽の鷺の微動だにせず佇む姿に、一日も早く拉致問題が解決するように思いを馳せているに違いないと、勝手に想像したものである。

龍神の靈に蟹這ふ波の音 中山宣

この句の「龍神の靈」は岩頭に龍神を祀る石の祠であろうか。波打ち際から蟹が龍神の靈に招かれたように、大小の石の間を横這って行く途中、大きな波に引き戻されてしまったのかもしれない。再び這い上がって行くであろう蟹の姿を想像した。龍神と蟹との取合せがユニークである。

しぐるる

喜多尾明子

黒雲の奥の青空遠刈田
柿熟るるみちのく街道人を見ず
銀坑へぬかる足許赤のまま
三段をはづみて猛し冬の滝
冬の日やこけしに細き目を入れて
短日の不意に高まる川の音
宿の灯のこぼれて冬の川明り
しぐるるや温泉郷に橋いくつ
だれもみぬ夜更けの湯浴み噓する
時雨忌の近し尾花沢にゐて



少し前のことになるが、連れ立ってくれる者がいて、山形まで出かけた。

十一月は微妙な季節だ。上旬には立冬がくるとはいえ、秋はなお名残をとどめ冬と併存する。赤ままだ野菊が咲き残っているかと思えば、曇り空なら周りの景色は未枯れて冬の色を呈する。

銀山温泉は最近とみに人気で、外国人の姿も多く、皆スマートフォンでの撮影に夢中だ。

そんな中、ひとときの旅情を楽しんだ。

登呂遺跡

本多ひとみ

雨上がり苦屋を渡る稲穂波
初鴨や登呂田の畦のぬかるみに
切株の朽ちし辺りに毒茸
数珠玉を握り幼き日の記憶
高床の千木に秋日のやはらかし
ちちろ虫人の入らぬ草の径
遺跡田の水面を叩く秋茜
秋霖や藁葺き屋根の茶褐色
日の当たる苦屋の裾にゑのこ草
さはさはと風に遊べり花すすき



登呂遺跡は昭和18年に軍需工場建設の際に発見された。日本で初めて弥生時代の集落と水田跡が確認され、稲作集落の様相が知られた。現在は、竪穴式住居や高床式倉庫等が復元されており、弥生時代の人々の生活がイメージしやすい公園として整備されている。

恒例で毎年2回、当地を吟行している。四季折々の風景から多くの句材に出会う心休まる地である。

故曾根同人が、日々散策し作句した地を、今後も訪ね詠み続けたいと思う。

新田の荘 大木 茂

縁結び寺の門の蹴放し小蟻這ふ
縁切り寺として江戸幕府に公認されていたのは鎌倉の東慶寺と太田市の徳川満徳寺。現在、廃寺跡は満徳寺資料館として本堂等が復元されている。「縁切り」と「縁結び」が同じ寺？ 不思議に思うが悪い縁を切つて良い縁に恵まれるという事らしい。

さて作者は「蹴放し」という段差のない門の敷居に小さな蟻を発見。縁結びの門ならではの出会いにあたたかい目を向けている。この小さな蟻にも幸あれと。

郭公鳴く縁切り寺の駆け込み門

この徳川満徳寺は鎌倉時代に尼寺として代々新田氏の子女が住持だったが衰退し、徳川家康によつて復興。故に町の名にも徳川の名が。離縁の叶わなかった時代は下駄でも何でも自分の物が門を通れば縁が切れたそうだと。季語「郭公鳴く」が情景や心情を存分に伝えてくれる。

青田風旧石器人駆けし郷

「青田風」を受けて遠い「旧石器人」まで発想が及ぶとは。日本の原風景といえる田を抜ける稲の匂いが読み手にも感じられた。

江戸期より銅街道驟雨来る

「銅街道」は栃木県の足尾銅山から江戸に銅を運ぶ街道である。江戸時代に開山し明治から昭和まで採掘量等の変化はあったが活用された。太田市にも銅蔵が残っている。掲句、下五の「驟雨来る」が歴史の道を印象付けている。広重の浮世絵の風景が思い浮かんだ。

梅雨 桑原優美子

走り梅雨包丁を研ぐ匂ひして
雨続きかと思うと突然からりと晴れ、家庭を守る人にとつて梅雨入り宣言などかえつて煩わしい。

作者はいま包丁を研いでいる最中。掲句はその動きを描くのではなく匂いに焦点を当てている。

だからこそ「走り梅雨」の季語が効いてくる。

梅雨の夜の路面電車は灯をこぼし

東京には都電荒川線と世田谷線に路面電車が残っている。雨の日は昼間も暗いが夜ともなれば尚更、東京とは言え賑わっていた町がしんと闇に沈む。家路を急ぐ人の目に濡れた道に映る路面電車の灯りが安堵感を与える。「灯をこぼし」の幹旋が臨場感を感じさせてくれた。

雑踏の一人ひとりに梅雨の顔

不特定多数の中だから気にならない事、逆に息苦しい事がある。中七の「一人ひとり」の書き分けにその様なことを感じた。無関心な顔、苛立つ顔、嬉しそうな顔が見えてくる。「梅雨の顔」の表現が秀逸。

梅雨明けし草間彌生の水玉に

季語「梅雨明け」と中七下五との二物衝突の句。

現在、草間彌生の水玉の作品を目にしたことのない人は少ないだろう。無数の水玉と強烈な色合い。だが決してこの句の二物の取合せに唐突感はない。理屈ではない「梅雨明けし」の解放感とこれからの暑さへの懸念など緋い交ぜになった思いが表されている。

梅雨を主題の十句に作者の力量を感じた。

私のこの一句

蛙 唾へ静まるを待つ山棟蛇 大橋雅子

数年前、九州高千穂の方へ旅した折の句。山道の真中に繩状のものがあり通る人は避けて歩いてきた。よく見ると口に蛙を唾えた山棟蛇であった。驚いてどうなることかと見守ったが唾えたまま動かない。蛙が暴れなくなるのを待っている様に見えた。見たままの句だったが秋の全国大会で曾根満先生の特選になり短冊をいただいた。時間がなくその場を離れたが、獲物を唾えてじっと動かないくちなわの印象は強烈だった。恐ろしいとか怖いという感覚ではなく、生きるための自然界の姿を見た忘れられない情景であった。故曾根満先生のご冥福をお祈り申し上げます。

神輿昇く母の手縫ひの肩当てに 塩井志津

令和3年「万象」全国俳句大会で内海良太先生の特選五句の中に入れて頂いた。10月中旬に氏神様の秋祭。晴れが多く雨の記憶は無い。昔この地区は男性の9割が漁師として各地で働き故郷の祭は一番の楽しみだった。今も祭には早くから駆けつける出身者も多い。見どころの一つ巡行の神輿は厄年の壮年団員が担ぐ。今は亡き隣人が「今年は息子が担ぐので肩当てを作るの」と話してくれた笑顔が目には浮かぶ。

初蝶や能登よりの人來るといふ 田中道江

時折冷たさの残る春先のこと、突然の便り。二人の子供が小学生の頃海外でお世話になった先生がおいで下さるとの知らせでした。待ち合せの場へ向かうと公園に舞い蝶。ついと口からこぼれ出た句です。

お会いして災厄の地への思いや築百年越えの御自宅の無事なことに安堵。又、当時はお若かった先生の御苦労の数々も今は楽しい思出等々と尽きぬ話に楽しい一日でした。俳句は叙事詩と心得ながら「万象」の目指す方向とは逸れて猶、心に消えぬ一句となりました。

ヒマラヤの空の青さや罌粟の花 広瀬俊雄

古くから「青い罌粟の花」は登山者のあこがれで私も氣にかけていた。そんな折カトマンズの知人からこの花を探す旅に誘われた。旅に出て10日目、山中の交易地ナムチエバザールに着く。そこから3日歩いて標高4500メートルのゴキョ湖畔に出た。

ここで各自ブルーポピーを探すことにした。まもなくあちこちで歓声があがった。幻の花が見つかったのだ。高山植物とは思えない直径5cmほどの花弁の大きさと、透き通るように繊細な青い色と雄蕊の鮮やかな黄色とのコントラストはまさに神秘的な美しさであった。

北から南から

天明鑄物のふる里

栃木 島田和枝

栃木県佐野市は、天明鑄物の生産で栄えた町です。

約千年の歴史を持つ天明鑄物の始原は、平安時代、「平将門の乱」平定のため、佐野を治めていた豪族・藤原秀郷が、河内の国（現・大阪）より、武器製造のため、鑄物職人を招いたという説があります。

「天明」は、かつて宿場町だった佐野市の旧い町名です。「天明」もしくは「天命」と表記されることもありましたが、江戸時代に「天明」の表記になり、現在も「天明町」という町名があります。

特に「天明」の名が全国に広く知られるようになったのは、茶道文化が花開いた安土桃山時代の頃で、「西の芦屋・東の天明」と並び讃えられ、天明の茶釜は、千利休や織田信長・豊臣秀吉や徳川家康など、多くの武将に愛されました。天明釜の荒々しく素朴な肌合いを持つ優れた技術が、武人の心を捉えたのでしょうか。

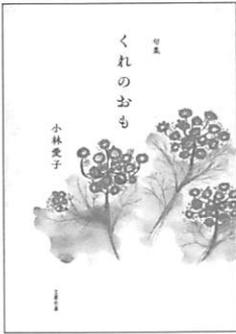
佐野市では、その技術と伝統を守るべく、城跡の記念館において、月毎のお茶会が開かれ、身近に茶道に親しむ市民の癒しの場になっています。

街中を歩いていると、あちこちに「金」の文字が入った名前の地名を見ることが出来ます。「金山神社」「金屋仲町」「金吹町通り」「金丸通り」、これらは、元々鑄物職人たちが集まっていた地域とみられ、今でも伝統を守るべく、鑄造所や国指定の重要文化財である燈籠や梵鐘など、様々な天明鑄物の作品に巡り合える街でもあります。

そんな街の鑄造所（窯元）を訪れての、吟行会も開かれました。（平成24年6月 吟行会）

鑄物師の麻の腰紐玉結び	飯塚 キミ
十薬や積み上ぐ鑄型野ざらしに	茂木 弘子
鑄造所塀の上なる七変化	上岡 佳子
鑄物師の母屋に古りし夏暖簾	島田 和枝
集落を廻る小流れ濃あぢさゐ	芝宮留美子
藜長くロープ囲ひの更地かな	阿部 澄
細工場の梅雨湿りなる古障子	増田 幸子
作業場に鑄物師使ひし洪団扇	亀田やす子

句集鑑賞 小林愛子第三句集『くれのおも』



令和7年7月、「万象」名誉顧問・小林愛子氏の句集『くれのおも』（「文學の森」刊）が上梓された。『阿夫利』『辻楽師』に継ぐ第三句集である。

小林愛子氏は昭和5年新潟県生まれ。昭和51年「風」に入会。沢木欣一、細見綾子に師事し、昭和56年に「風」同人となり、「風」賞、「風」評論賞を受賞するなどの活躍を続けられ、「万象」誌と神奈川の句会において、長く俳句実作の指導に当たられた。又、「万象俳句会」幹事の一員として、創刊以来15年間の会計業務、並びに6年間の発行所業務の重責を担われた。現在は、名誉顧問の職にあり、「万象」誌では「風音散步」で「風音集」の有力同人の作品鑑賞執筆において遺憾なき力を示されていることは誰もが知る所である。

句集の題名「くれのおも」は、集中にある次の一句からとられたものである。

くれのおも早や夕風をまとひけり

この言葉は、作者のご自宅に栽培されている「茴香（ういきょう）」の古名であるという。

これまでの俳縁への感謝を籠めてと、同人と会員を隔てることなく届けられたこの句集から、やさしく豊かなハーブの香りが漂ってくることだろう。

本誌では、江見悦子主宰並びに客員執筆者の橋本清氏のほか、8名の同人から句集の鑑賞文を寄せていただいた。

自選十句

首塚のあと胴塚へ麦の秋
 乗り越して見知らぬ町の月に逢ふ
 人影の消えてらんまんたる桜
 秋もはや落つるにまかす山葡萄
 寒波来るロビーに為替レート表
 行くところ日向は茅花湧きいづる
 炎天下足場へスパナ投げ上げし
 よろけ杖毛虫潰してしまひけり
 シャンプーの頭預けて年の暮
 新玉の年の日を受くわが余白

（編集部）

高い知性と柔軟な情感

江見悦子

小林愛子先生が第三句集「くれのおも」を上梓されたことは嬉しい驚きでした。思いもかけず「万象俳句会」全員が句集を賜りました。ご厚情に心から感謝いたします。

先生の最初の句集「阿夫利」は、ご主人を亡くされた40代の句から始まっています。それから約50年、満95歳での刊行になります。半世紀にわたる俳句人生を先生はどう送って来られたのか、2冊の句集（「阿夫利」「辻楽師」）を改めて読んでみました。

「阿夫利」のあとがきにこうあります。「俳句は自分を取り戻すことのできた「場」であり、精神の脆弱化を防ぐ堤でもありました。」自身を客観化した毅然たる文章に感銘を覚えました。

「辻楽師」のあとがきには「私はこの道に入門してより即物具象の写生を学んできた。（中略）日常茶飯のなかで、人間を含めての大自然に対し問いかける姿勢を持ち続けた」とあります。

先生のご自宅には丹精の植物が溢れています。野葡萄のアーチ、オールドローズの大株、様々なハーブ、台所脇の柚子、露の露、茗荷等々。毎日の食卓を豊かに彩る植物です。（八十路にてオールドローズの香に凝れる）（秋もはや落つるにまかす山ぶどう）。庭には沢山の生き物が棲んでいます。（肩の上の守宮に好かれ老いけらし）（胸に付く枯

とろろは私はざり）（よろけ杖毛虫潰してしまひけり）ぎよつとする句も。（死なばごみ生きて地を這ふ秋の蟬）

先生からこんなことも伺いました。「毎日寝る前に、今日何があったかを思い出して俳句を作るの。」日常茶飯の中から詩因をつかみ取る句の数々は、（春泥のこの地と決めて半世紀）を暮らした笹野台の地から生まれたものです。

全293句の中で、もつとも心に響いたのは、かつて（髭の中口が開きて土用餅）と詠まれた息子さんの、若すぎる死を悼んだ句群です。（柩いま桜芽吹きの下行けり）という即物具象の句は（二つこと思ひ暮すに齒菜萌ゆる）（墓守にほたるぶくろは白ばかり）と、詩に昇華していきます。

「阿夫利」の「序」で、沢木欣一先生はこう書かれました。「小林愛子俳句は把握が確かで、組み立てがしつかりしている。（中略）知・情・意の働きのなかで特に知性が高くしかも柔軟な情熱と調和している。」

この講評は、俳句と共にある暮しの中で進化し、深みを増してゆきます。自由で前向きな精神の下に幅広い経験を重ね、「生と死」の哀歎を胸中に抱いて生きて来られた先生の人生につながります。

今年の新年の句（新玉の年の日を受くわが余白）は細見綾子先生の（わが余白雄島の蟬の鳴き埋む）を思いださせます。どうぞこれからも、何色にも染まる白い紙の上に、おおらかで清新な句を綴って下さることを念じています。

『くれのおも』の花摘み

橋本 清

(「万象」客員執筆者)

とらわれない俳句宇宙

中村千久

野辺を散策しながら時折立ち止まり、目についた花を愛でる。句集を読むとはそれに似た体験ではないだろうか。

ここに「花摘み」と題した所以である。

しぐるるや裏返しある貸ポート

季節が過ぎ、役目を終えてひっそりと横たわるものが時のわびしさを可視化している。中七は著者一流の写生。

雨けぶるさねさし相模浅蜷飯

「さねさし」は「古事記」の歌謡に出てくる「相模」の枕詞。「浅蜷飯」は近世以降の庶民の食べ物。古代から現代、悠久の時空を超えて春雨が降るのである。

咲き満ちて花野は色を失へり (悼内藤恵子さん)

東日本大震災発生直後、指揮者の佐渡裕氏は言った、「世界から色が消えてしまった」と。追悼としてこれ以上の嘆きはあるだろうか。

遠き日や童謡カルタの鬣馬の耳

わが子が幼かった頃に遊んだカルタ。過ぎ去った日々へのノスタルジアに似た思いは、蕪村の〈遅き日のつもりで遠きむかしかな〉の抒情に通じるものがある。

※筆者は本誌連載の「万葉集」に尋ねる抒情の源流」の執筆者

著者と同郷の新潟県人である。

(編集部)

「万象」誌に掲載される愛子俳句を読み、この句集に載る作品を読みながら、「俳諧自由」、こんな言葉を思ったりする。「自由自在」と言ってもいいかもしれない。句材として採り上げた作品の中に、文学、絵画や音楽に関するものがあつて、そんなときにこの自由度が光彩を放つ。

例えば、カミキリムシを目にして〈これやこの伊達な天牛衣装かな〉と詠む。確かに！そして「これやこの」は蟬丸が詠んだ和歌から得たものであることに気づく。例えば、泰西の古今の画家がテーマとした「受胎告知」をサンマルコ修道院で目にしたとき、聖母マリアと大天使ガブリエルを描いた敬虔な宗教画を観る作者自身を〈着ぶくれて受胎告知を拝したり〉と詠む。このギャップが私には堪らないのだ。集中には、音楽に材を採ったものもあつて、作者の嗜好の一端を垣間見せてくれる。〈春愁やサティの楽をくり返し〉。サティは「音楽界の異端児」と呼ばれた19世紀フランスの作曲家だが「ジムノペディ」の柔らかな旋律は誰しもが耳にしているはずのもの。お気に入りだがサティだけではないことは〈煤払ふ書棚にマタイ受難曲〉(木の実落つジャズのビートの昂りに)といった句からも窺える。いかにも「風」で修練を積んだ人ならではのと思わせる作品の中に混じるこれらのモダンで新しみのある作品、これらも愛子俳句の特色と言ふべきだろうと思うのだ。

元気を貰った句集

福島せいぎ

小林愛子さんは、私が「風」の同人になったときには、すでに「風」の若手俳人として注目を浴びていた。このたび上梓された第三句集「くれのおも」には、愛子さんの80代から95歳までの珠玉の句が網羅されている。一冊の句集を出すのはエネルギーの要る仕事であるが、愛子さんの元気さと意欲に敬意を表したい。(人影の消えてらんまんなる桜) (真つすぐな青麦活けて明日は明日)などの愛子さんの句は、師沢木欣一の「理」と細見綾子の「情」を享けて、あたかも両界曼荼羅の感がする。しかも、愛子さんの句は洗練されていてお洒落である。何年前かの「万象」大会の席で、挨拶のときに軽々と壇上に飛び乗った愛子さんに驚いたことがあった。

集中、滝沢伊代次さん、大坪景章さん、内海良太さん、内藤恵子さんへの甲句も心を打つ。なかでも、ご子息の小林隆さんへの句(棺いま桜芽吹きの下行けり)には、僧の一人として無常迅速の思いを禁じ得なかった。

小林愛子さんという大きな目標に向かって、私も残された80代の時間を美しく生きていきたいと思っっている。すばらしい句集との出会いに感謝している。

知的な情感

中條睦子

「くれのおも」は「今日の続きとしての明日も、美しい自然を感じていきたい」と言う、95歳にしての自選句集。

くれのおも早や夕風をまとひけり

巻頭の章にある句集名とした作品。「くれのおも」はウイキョウの古名とある。莖の高さが1、2メートルになり、夏、黄色の細かい花が群がり咲き、香気が強く香味料としても知られている。眼前の夕風にしなやかに靡くくれのおものを「夕風まとひけり」と捉え、「くれのおも」の古名を用いたところに知的な情感が調和している。

乗り越して見知らぬ町の月に逢ふ

セロ負うて露けき町を通りけり

膨らんで蹴つてくれよと煙草

書売れり枯れあたたかき色の中

森といふ大きな楽器秋の蟬

などに見られる身辺の対象を見る目にも、円熟味のある自在さを感じさせる。

柩いま桜芽吹きの下行けり

逆縁の盆花紅をあふれしめ

身近に起きた悲しみ事をも、気丈に捉え、美しい自然へと昇華している。達観した精神性を感じさせる句集であった。

俳句と出会い40年が経ちました。PTA読書部繋がりの方が坂の上の先生のお宅に伺ったのが句会のはじまりです。広いお庭にはいつも折々の花が咲いていました。当時は春の金縷梅にはじまり、夏は菖蒲の大鉢が並び、秋は垣根に郁子の実が垂れ、冬は柚子がたわわに実る明るい庭を眺めながらと、今振り返ってみても本当に贅沢な時間を過ごさせていただきました。

お庭は菖蒲から薔薇に変わり、お料理に使われたのでしよう、ハーブも育てられ茴香（くれのおも）を教えていただきました。その後も先生ご指導の句会、そして句会後のお茶会の楽しかったこと。吟行にも誘っていただきました。句集を開くたびになつかしい思い出があふれて今は感謝の気持ちでいっぱいです。

蠶やバナナの皮にかすも増え

句集の最後のページに載る句です。バナナは黄色い皮に茶色の斑点が増えると食べ頃のおいしさになるようで、その斑点をかすも（そばかすのこと）に見立てたユニークな発想。「蠶」という黄砂の季語が効いて趣が深い句です。家の中で過ごす事が多くなされた先生は日常の中でささやかな出会いに光を当てて詩を掬い取っておられます。あらためて身の回りをみつめなおしたくなる。そんな力を頂きました。

「くれのおも」は、一句の余白に同じ時を過ごせる、心を重ねられる、親しく嬉しい句集だ。

忽然と庭に人ゐる朝の薔薇

「忽然」という言葉が、正に忽然と投げ出され、続く「庭に人ゐる」の措辞に読み手は立ち止まるのだが、それは「朝の薔薇」の世界への誘い。放り出されて包まれる。心ざわめき癒される。愛子俳句のこの世界は新鮮だ。

上り待つ下り電車や秋の暮

ホームに止まる電車だけを置くこの句は、何も語っていないから、私達は同じ現場に立ち、愛子の景の中に自分の景を見る事ができる。「秋の暮」は、愛子俳句の大きな余白だ。

ごはん粒甘きまで噛み朝桜

誰もが体験する、それも日常の些末な行為、時間がこんなにも美しい朝の景色になる。「甘きまで」の体感の把握。静かに置かれた「朝桜」の艶。選ばれた季語の力を思う。

「今日の続きとしての明日も、美しい自然を感じていきたい」。あとがきのこの言葉は、俳人小林愛子の生きる姿勢そのものである。愛子俳句の明日を緋く「くれのおも」。夕風の静かな調べを纏い心寄せて、緋く一頁一頁に私達のそれぞれの物語を重ねてみよう。

先頭に行く松明

岡本敬子

想いのままに

山本とく江

『くれのおも』のご上梓おめでとうございます。

さらさらと才氣迸るこれ迄の句集から何歩も前へお進みになって、静謐・透徹の世界を静かに、力強く歩み出された。

95歳の一人の女性の達した豊かで澄みきった列の先頭に、あかあかと掲げられた松明を拜見する思いである。

〈頭刺り青水無月を病みぬたる〉〈極いま桜芽吹きの下行けり〉〈春愁や花百本を挿してなほ〉前半にご子息の死を悼む句があつて胸が痛んだが、その6句後に〈新茶汲む湯をやはらかく使ひけり〉があり、「やはらか」に到達なされたことの静けさ思った。

そして、〈桐櫃に米を満たせる十三夜〉〈飯嘖く香落葉まみれの家に住み〉〈湯のあとにはゆるやかに着て居待月〉〈臘夜の仮名書華ともみみずとも〉〈胡麻を炒る火の美しき野分かな〉〈真つ白な筆買ひに出る雁の頃〉と豊かな充足が描かれる。〈年上も年下も老い走り蕎麦〉〈嵌められぬ白シヤツ鉤二度わらし〉老いもすべて諾って松明は芳しい。

ご一緒して風木舎を訪れたことがあつた。欣一・景章両先生と高弟たちが囲んだ夕餉の卓は、「ダ・ヴィンチの晩餐図」のように思われた。愛子先生はいつもそのことを言われる。〈根株一つ風木舎跡しぐれけり〉

第一句集「阿夫利」の序で沢木欣一先生が「知性が高く、しかも柔軟な情感と調和しているのが愛子俳句の長所である」と書いており、博識・視野の広さに感心した。

第二句集「辻楽師」では、自由闊達に吟遊し即物具象された俳句、自然への眼差しの深化に感銘を受けた。

さて、第三句集「くれのおも」ですが、御子息を亡くされ、ご自身も大怪我をされて、人生を達観する作者の日常生活を垣間見たような臨場感があります。

この句集には生き物の句が40数句あり

逆光に脚垂らしとぶ秋の蜂
吹かれ来し和紙の色なる子かまきり

冬の蝶土手の日向を拾ひつつ

生き生きと対象を活写した即物具象の句となっている。

春愁や花百本を挿してなほ

御子息に先立たれた句からは深い傷心の気持が伝わる。

籠り居も長しごきぶり減多打ち

コルセットの中の鼓動や木の芽雨

新玉の年の日を受くわが余白

老境にありながらも瑞々しい感性、想いのままの表現に俳味があり、更に円熟味が増して正に愛子句集だと思いません。

思いもかけぬこと

高橋ひろ

コーヒーはブラック窓にヒヤシンス 砂地宏子

「くれのおも」「くれのおも」、言葉の響きが美しいが、歳時記には見当たらない季語だった。何となく気の惹かれる「くれのおも」の薫る地。そこは野趣に富みながらも雅な俳味を持つ地だった。

くれのおも早や夕風をまとひけり

八千草や母の着物に手を通す

物買うて後の気落ちや十二月

胡麻を炒る火の美しき野分かな

胡麻は一粒ばちつと跳ねたら火から外せと母に教わった。その瞬間を待ちながら火を見ている。風が荒れている。

林檎のバイ焼いて小さな家に住む

庭の木のふと太とある良夜かな

寒月に別れの杯を満たし置く

新茶汲む湯をやはらかく使ひけり

煎茶を淹れるとき、適温になるまで冷ますのは誰でもがすること。やわらかく湯を使うという表現は初めて。新茶への敬いと喜びが表されている。

遊び心という心のゆとりに溢れた一句一句をしみじみと感じ、涙し、笑いとそして共感と。有難いことでした。

それにしても、「くれのおも」がフェンネルであったとは。

初めて小林先生のお姿を拝したのは、平成30年の全国俳句大会の折であった。発行人報告をなさる凜としたお姿が忘れられない。今回「くれのおも」を拝読しながら、その時の思いが蘇ってきた。

表題に取らせていただいた〈コーヒーはブラック窓にヒヤシンス〉は、表記はほぼカタカナ、ブラックコーヒーとヒヤシンスの取り合わせ、そして破調。伝統的な「風」「万象」を離れた自由な作風に、どこからかジャズが聞こえてくるような気さえた。表現したいものを、相応しい形で思い切つて表現する、そこに作者の凜とした姿勢が窺える。そして、それが読む者に勇気を与える。〈踏みだして靴きゆつと鳴る淑気かな〉〈真つすぐな青麦活けて明日は明日〉。

この句集は平成23年から令和7年の作品が収められた。社会も個人も大きな変化に見舞われ翻弄された日々であった。(バンダナを締め炎帝の魔の刻へ)と詠む覚悟。その深さが、私の励ましとなった。(屠蘇酌みてラブラドルと戯れて)いる姿に、「窓にヒヤシンス」を見つめる明るい方向を好む作者の本質が見え、共感に繋がっていくのだと思う。ベンチの隣で(地震の後湧き立つ薔薇の新芽かな)と教えてくれる人がここにいます。

子規の写生論の展開 (一)

高木良多

一 俳句分類

正岡子規は自己の俳句実作と研究の中からどのようなして写生論を打ち立てていったか。子規の生涯の大事業「俳句分類」について、子規は、明治三十年十二月三十日「ほと、ぎす」に次のような一文を寄せている。要約すると、

この仕事に従事してから七年ほど経っているが、分類に甲号乙号丙号丁号の区別があつて合わせてこれを積めば、その高さは自分の身丈に等しいくらいである。甲号は俳句を四季と雑に分類し、更に四季の各題を天文、動物、植物、地理、器物、衣冠、神人、建築、飲食、肢体、人事、日時、爪牙、枝葉、氣象、倫理等に分けてある。

そして此書中に収める俳句はなるべく多からんことを欲するので、完結する予定はない。ただ自分が力尽き、身斃るときをもつて完結となることであろう。

また、此書を編集するにあたっては最古の俳書より始め、連歌、貞徳、檀林、芭蕉を経て今や漸く天明に入ろうとしている。

つまり、俳句を分類することを目的としたものであるが、古今俳人の作風の比較をして、子規は、その作風に著しき差のあることを知ることになつたことと思ふ。

その作風の比較について、子規はまず、

古池や蛙飛び込む水の音 芭蕉
柳散り清水涸れ石とところどころ 蕪村

の二句をとり上げ、

「両俳家両時代の理想の相違如何に甚だしきかを知るべし。蕪村の柳散りの句の如き材料多く印象明なる者はたまたま芭蕉が作らざりしに非ずして芭蕉時代には未だ此種の句風を為し得ざりしなり。芭蕉は此の如き句を嫌ひて作らざりしに非ずして此種の觀念を毫も有せざりしなり」として蕪村の句の印象の明瞭なることを知るに至る。子規は生涯をかけて編集してきた「俳句分類」と、それと並行してきた夏目漱石の愚陀仏庵における連日の句会の中から得た成果を、新聞「日本」に「俳諧大要」と「明治二十九年の俳句界」として発表、俳句革新の口火を切つたのである。(次号につづく)

【著者略歴】

大正12年6月10日、千葉県佐原市津宮に生まれる。本名三郎。昭和43年「春耕」に入会。皆川盤水の手ほどきを受け、すぐに「風」に入会、沢木欣一に師事。「風」同人、「春耕」顧問、社団法人俳人協会評議員。句集「雪解雲」他、著書に「蕪村遍歴」(有文社刊)。

「子規・写生―没後百年―」(沢木欣一編 角川書店)より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

我がやどの 夕影草の 白露の

消ぬがにもとな 思ほゆるかも

(四・五九四)

「わが家の庭の夕影草に置いた白露のように、もう消えてしまひそうなほど、無性にあなたのことと思われてならないのです。」

笠郎女が 大伴家持に贈った二十四首の相聞歌群の中の一
首。前回取り上げた一首に続くものです。

「夕影草」、このカゲは光の意で、夕日の光を浴びて生い立つ草ということ。「消ぬがにもとな」、ケは下二段動詞「消」の連用形。又は完了の助動詞で、ガニは、(シソ)ウナホドニの意の助詞。モトナは、動作・作用・状態が反復・継続することを強調する副詞で、「しきりに・やたらに」などの意。

草葉に置いた露がはかなく消えてしまうように、あなたのことが恋しくてもう死にそうですと訴えている歌です。ただ、ここで注意しなければならぬのは、上句を「消ぬがに」を言うための単なる比喩にとらえてはならないということ。

同じ歌群に、「闇の夜に鳴くなる鶴の外のみに」(五九二)とあるので、表題歌は鶴の渡つて来る頃、晩秋から初冬にかけての歌と考えてよいでしょう。したがって、開いた戸か窓から庭の草葉の露を見やっっている作者は、ぞくぞくす

るような肌寒さを覚えていたに違いありません。それは、切ない恋に苦しみ続け、衰弱していた身体にさぞ応えたことでしょう。

「消ぬがに」は、そうした身体感覚によつて裏打ちされているのです。このまま露のようにはかなくなつてしまひそうだというのは、掛値なしの実感だった。落語の「崇徳院」に出てくる若旦那のように、恋い焦がれて死にそうになるということが昔はあったのです。

「白露」は無機物だから、勿論、生命はありません。しかし、作者の心身の状態が自らの命をそれと重ね合わせ、そこに生命を見出させているのです。だから、上句は、「生命を写す」という意味の写生に近い表現として受け取るべきところではないか。

作者の心身のありようが生命を持たない対象にもそれを見出し、そこに自らの命を重ね合わせている例を、近代短歌から挙げてみましょう。

ゆふされば大根の葉にふる時雨

いたく寂しく降りにけるかも

(斎藤茂吉「あらたま」)

何の変哲もない情景ですが、雨という無機物の状態について「寂しく」と形容している。あたかも雨に感情があるかのようです。それはやはり作者のその時の心身のありようが降る雨に命を見出し、自らの生命感覚と重ね合わせていることを示しています。だから、単なる主観的な情景表現ではありません。作者は自選歌集「朝の螢」(大正14年)の巻末記で「これは写生の歌である」と言い切っています。



大阪駅

徳島 山本瑤子

人と人との出会いや別れ、悲喜こもごもの「駅」。昭和40年代の大阪駅（通称・梅田）は人と活気に満ち溢れとても魅力的でした。駅の東口が高校卒業後の進学や就職で上阪した私たち同級生の待合わせ場所でした。初めての都会は見ること、聞くことのすべてが新鮮な驚きでした。中でも綺麗な洋服で颯爽と歩く垢ぬけた人々がとても眩しかったのを覚えています。待合せして大阪城、難波、道頓堀、御堂筋等々へ。ちょうど開催されていた1970年の大阪万博へも団体で見学。太陽の塔、月の石、人間洗濯機には驚きと感動でいっぱいになりました。今の大阪駅には昔の面影は無く、立

派に、美しく変貌を遂げていますが、雑然としたあの頃の駅が今も懐かしく思い出されます。

帰省駅

茅ヶ崎 久保田富士子

故郷の紀勢本線（三重県亀山市から和歌山県和歌山市）の「加茂郷駅」。駅の名の由来は解りませんが、昭和30年代初め、高校3年間汽車通学だった頃、朝の長いプラットホームは人、人、人だった。やがて車社会となり、今はほぼ無人駅になっている。

学校はひと駅先だったが、その間にトンネルが4つ、混み合うデツキにしか乗れない時、夏の白いセーラー服に煤が降りかかり、息を止めていなければならなかった。重々しい蒸気機関車から電化されて久しいが、帰省は今もこの駅。改札口にはいつも必ず父が、父亡き後は兄が手を挙げ笑顔で迎えに来てくれた。

木製の改札口は角が磨り減り、つるつる丸味を帯び、いかにも古めかしい。駅舎はいつたいたい築何年になるのだろうか。

姨捨駅

船橋 中嶋久登

姨捨駅は、塩尻駅から松本を経由し篠ノ井駅を結ぶJR篠ノ井線の途中駅である。小学2年の時初めて松本駅から蒸気機関車に乗った。黒煙を吐きながら姨捨駅でスイッチバックし、冠着トンネルは窓を開けていたので黒煙が入り吃驚した記憶が残る。

1900年（明治33）11月開業の姨捨駅は、風景の美しさが有名で、日本三大車窓に指定されている。また、棚田に月が映える「田毎の月」など観月の名所としても有名で、松尾芭蕉の句碑がホームにある。

おもかげや姨ひとりなく月の友
蒸気機関車の重連で真つ黒い煙を吐き、喘ぎながらやと冠着トンネルを抜け長野駅に着いた。列車の中で食べた父母弟四人での、むすびの味も忘れられない。

ふなやしの駅

金沢 菅原雅子

我が家の沿線に北陸鉄道浅野川線の駅があります。令和7年は開業100

周年の年になります。開業当時の1925年は大正14年で、その頃の北陸の田舎はどんな風景だったでしょうか。殆どの人が農業に従事し農作物を運んだり、終点の内灘駅は日本海に近く、魚の運搬にも利用されたことでしょう。北陸の宝塚と呼ばれた「栗崎遊園」もあり、多くの家族連れや若い人が利用したものです。

私自身は、終点の内灘町で育ち浅野川線の電車に乗って青春時代を過ごし、今に至るまでの60年近い歳月を、この路線を使い過ごしてきました。

改めて電車の近づく音や、レトロな電車のフォルム、駅舎の佇まいに平和で長閑な次の100年が、続くことを願っています。

北広島市

札幌 佐々木 茂

駅名に所在地の市町村名を用いることは至極あたりまえの事だろう。しかし駅名に、所在地以外の市町村名が採用されると、例は多くないだろう。だが実例がある。北海道は北広島市だ。

ここで歴史をぐんと遡りたい。明治16年、広島県人と田郁次郎は北海道開拓を志して、単身渡道。石狩国札幌県月寒村字輪厚を適地として開墾地百万坪の請願等を行って、翌年、広島県人25戸を入植させた。公平を旨とする和田のもと、入植者は増え続け、同26年には385戸になった。これを見た北海道長官は広島開墾地を「和田村」として独立する様に勧めたが、和田は固辞し、「広島村」としたい旨、願って認められた。村は着実に発展を続け、大正15年、現在のJR千歳線が開通し、北広島駅が置かれた。駅名は好評で市の名称となった。

静岡駅で

静岡 松永博子

竹内まりやの『駅』が好きた。「見覚えのあるレインコート 黄昏の駅で胸が震えた」から始まるこの曲。渋谷駅がモデルらしいが、一曲の中にまるで映画のようなドラマチックな展開がある。前奏の切なさ、バラードに乗る彼女の低い歌声が聴く者の心を打つ。かつて静岡駅の改札口で忘れられな

い場面があった。名残惜しそうに向かい合うカップル。彼の方が改札を抜けエスカレーターで階上に。そして、上り切ったところで彼は振り返った。最後に彼女に手を振ろうしたのか。ところが、彼女の姿はすでに消えていた。何とも言えない彼の表情。ついさっきまでの二人の姿が、彼女の顔が浮かぶ。二人の間にこれからどんなドラマが展開するのだろうか。そんなことを思いながら、私は駅を後にした。



「万象ノオト」投稿募集

▽4月号「血 庄」(12月末日締切)

▽5月号「旅」(1月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

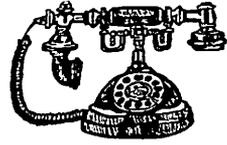
▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

万象作品

江見悦子選



○大声に返す大声入道雲 佐倉 鈴木隆久

脱ぎ捨つる野良着は汗の重さかな
風死すやページ繰る手の気怠くて
敗戦忌ガラス細工の平和かな

○道端の草々に問ふ敗戦忌 市川 奥澤よし江

過ぐる風とどまる風に赤とんぼ
葉隠れにほつほつ灯る葛の花
砂浜に貝の影伸ぶ夏の果

棚経やいつも縁より上がる僧 焼津 小梁洋子

弦ゆるむ夫のウクレレ蚯蚓鳴く

○庭草のいのちあふるる子規忌かな
ゆつたりと雲と水ゆく豊の秋

小松島 田上幸子

疎覚えの読経途切れず今朝の秋
塀越えて撓ふ母校の夾竹桃
ヘリの灯を一つ残して花火果つ

○反芻の麒麟の涎いわし雲

○ぎゆうぎゆうのリユック仰げ反る残暑かな 柏 村田由美子

じりじりと貌の歪める秋暑かな
微かなる風生まれたり鉦叩
身構ふるボクサーのごといほむしり

○は佳句に選ばれました。

○秋の雲防霜ファンのからからと静岡 杉田義則

藍染の絞り糸解く水の秋

吾亦紅金堀衆の小屋の跡

秋風やくるくるくると鈍屑

○玻璃厚き六角堂へ夏の浪三鷹 高尾早弓

露天湯の茨城弁や夏の月

無国籍料理の屋台夕涼し

網棚に並ぶ手土産星まつり

○ゴール後の新涼の風頬掠め札幌 石田 睦

朝採りの籠に溢るる太胡瓜

風通る居間に昼寝の娘かな

早朝は創作の時露の庭

雨あとの水辺に群るる秋あかね

アドレスの消去ためらふ星月夜 杉山和廣

○老犬の吾の影歩く残暑かな

連山に影をあづけて秋の雲

満月をすつぱり胸に収めけり

稔り田に鳥影走る風走る

風遊ぶ千草の原をほしいますま

杉山鈴子

たをやかに風の意のまま秋桜札幌 園田鶴子

久々に秋刀魚の躍る魚市場

月蝕を望む未明や秋の空

添水鳴る真昼足音絶えし時

ロケットも手作り町の文化祭

商店街行く椽の実を踏まぬやう

姉植ゑし桔梗は姉の墓守り

虫集く大病院の空地より

公園にどんぐり落つる音かろし

初さんまに醤油一滴垂らしたる

ゲリラ雨止んで静寂を照らす月

釜の底に残る夕餉の栗ごはん

苦味良し今年は肥えて初秋刀魚

新米の味有難し塩むすび

炊立ての栗めしの膳母の味

羽黒詣で無心に祈る喜寿の夏

山車小屋を繰り出す歴史絵巻かな

色と香に白米映ゆる月見豆

初秋の水で炊きたる備蓄米

仙台 富田洋子

河童淵の風に揺らげり花ホップ

廃校のトーテムポール夏の昼新潟 齋藤 信

炎天や演習場の発砲音

高速の舗装新たなや雲の峰

夕食はチンでよろしと生身魂

○妣の年いつしか越ゆる夜の秋

幾度も鉦のひびきや秋彼岸

酷暑にも挨拶元気隣の子

父親の拙き提琴夏休み

帰り来し車にピンクの百日紅

若き父育休中のアロハシャツ

晴天のグラジオラスの強さかな

稲妻の下には熱きスタジアム

我が齢唸るクーラー支へたる

古古古米過去は忘れて酷暑生く

出逢ひたり家主顔なる青大将

○米袋積みあげ二百十日かな

生き残る雑魚を数へて秋彼岸

米袋 一等の印厄日過ぐ

ほまち畑南瓜の蔓に道とられ

芳賀

稲川清子

○カーテンに残暑の朝日ゆがみをり

代々の墓を囲みて稲熟るる

稲刈つて娘の赤飯の届きたる

草取るや夕陽に今日はこれまでと芳賀 福武幸子

○日焼の子肩より脱皮はじまりぬ

暁のしじまに蟬の啼き初むる

無造作に木槿おほへる蔓を切る鹿沼 渡辺利子

形より色よきものを林檎狩

思ひ出す熟柿のうまさ佐渡の旅

輪唱のかごめかごめや秋桜栃木 飯塚キミ

草の実のくつつく軍手一休み

実石榴の薄く色づく軍馬の碑

海草の足にからまる土用波佐野 仲山さよ子

蕎麦屋混む盥に大きな花水

終戦日脳裏にいつも赤い空

秋暑し四肢不揃ひに亀泳ぐ義本 美智江

句帳開くベンチにふはと放屁虫

鳩時計ぼつぼつと夜半の秋

風渡り稲穂の波の押し寄する志木 汐見克彦

銀行に年金の列終戦日

爽やかやよちよち歩きの得意顔 志木 森山洋之助

茅葺きの消えしふる里曼珠沙華

葉は萎えて花は盛りの酔芙蓉

天の川見上げて佐渡の一夜かな 新座 多田英治

萎えし脚今ひとたびの佐渡の月

今日一日無事を喜ぶ天高し

ざり蟹の泥を掻きつつ後ずさり 酒々井 小林あけみ

蹲踞へこぼるる軽さ百日紅

片蔭に深呼吸吸せり野球の子

秋茄子のひかり厨の暗がりに 佐倉 新谷八郎

蚯蚓鳴く鎖骨の窪み深まりぬ

新薬の青き匂ひを束ねけり

初さんま能登の塩振り焼きにけり 有泉 正夫

野球部の声うしろから夕焼雲

郁子の実の風に揺れる日暮とき

送り火を焚き上げ空に一礼す 杉田 富美代

○追ひ抜いてほとばしる汗石段へ

夕暮の外吹く風や涼新た

今朝の秋手櫛の指のよく通る 鈴木 美根子

氷水残り少しをもてあます

「よく噛んで」母の口癖秋彼岸

新米が届いて糠の匂ふ部屋 佐倉 米田敏子

独り住むごきぶり打つてひと休み

草苗や少年母を後にして

明日咲かむと蓮のつぼみのふくらみて 船橋 近藤澄子

日の暮れて粟又の滝見おろしぬ

粟又の滝を近くに坂下る 山口 秀吉

試歩の道蟻に邪魔され一休み

蟬の声びたりと止んで月変はる

竜巻が普通となりてこの暑さ 柏 鹿毛満子

「白い皿」子の指差せる夏の月

ひぐらしやほとり厨のひとしづく

干梅をひとつふくみてかくれんぼ 松戸 石川幸子

人影の無き古ベンチ赤蜻蛉

落蟬に人差指を近づくる

落蟬の腹の白さや茜雲 菊岡 緋路

あめんぼう忍者のごとく飛びにけり

縁側に西瓜を食ぶる姉妹かな

秋暑し身をかがめ入るにじり口 寿多 映子

寡黙なる義母の針目や白緋

ティーシャツの背中吹き抜く秋の風

男坂祭ばやしの下り来る

○通院と家事のひと日や蟬時雨 松戸 渡部洋子

日盛や人影の無き旧街道

人影の疎らな路地や晩夏光

秋風に吹かれて矢立初めの地 東京 安藤美酒々

千住宿四百年を秋うらら

旧街道の幅はかはらず虫の声

ヘリコプター大輪花火下に見る 大場 八朗

隅田川花火も町の灯も映す

朝顔の蔓に一輪團十郎

早起きの父の田廻り稲の花 北口 富栄

星月夜銭湯帰りも遙かな日

かなかなや句会帰りの小買物

笹の葉に鉛筆書きの星祭 齊藤 孝夫

弟を上からあやす扇風機

線香の白き煙や野分あと

今朝の秋程よく焼けし目玉焼 高野 翠子

代金を機械に入るる残暑かな

○歩き出す頬にたしかな秋の風

水槽の目高せはしく右左 東京 鶴田智美

寂しさや盆に届きし師の訃報

水風呂を飛び出し走る裸の子

色づきて広がる枝や実むらさき 中澤 桃子

花芒線路に沿ひて靡きをり

秋日和池に逆さの電波塔

底紅を手折りてみれば滴落ち 橋本 紀代子

向き変へて夕日にヨット帆を張れり

グラウンドに球児の汗のほとばしる 平子 甲奈

二階バス日比谷に揺らす花木椋

一葉の残暑見舞の文字清し

宿題の頁に迷ふ残暑かな 平澤 一宏

荒川のほとりをとんぼ飛び交へり

葉の揺れて涼しさ運ぶ朝まだき

江戸川の花火見おろす窓越しに 前川 昇

飛沫あげ幼子あそぶ終戦日

採り忘れ二倍に太るオクラかな

ふるさとの小さき神社の盆踊 宮崎 正義

あえかなり白きレースの烏瓜

秋深し最上川の堤防歩む影

夾竹桃薄きピンクの重なりぬ

水澄むや御嶽ウツタケの祠掃く老女 調布 荒井 仁

島唄の長き余韻や緑さす

古墳よりばつた湧き立つ終戦忌

友の背のちさき曲りや手毬花 三鷹 植村康子

梅の雨降りやまぬ夜の木戸重き

○母の香の香水瓶にうすき塵 南場雅子

新秋や高校野球の三塁打

朝の窓入道雲と対面す

幾度も落つる轟音はたた神

かの日見し草刈る畑に焼夷弾 府中 竹村晃子

今年米早刈りしたと友の声

グランドに人影もなき酷暑かな

○輝けり二百十日の鬼瓦 日野 松原悦子

七人を育てし母のとろろ汁

亀産まると放送響く園さやか

○瑠璃色のとんぼ見送る墓参 藤山 松井宣夫

宵闇にゆらりゆらりと酔芙蓉

ぎこちなき梨売りの声農高生

やつと夜山の向かうの遠花火 青梅 横井一美

夏休みつるんで歩く中学生

濃きピンク毒を秘めたる夾竹桃 投票の人影まばらカンナ咲く 横浜 大駒泰子

秋暑し機関銃のごと子の喋る

○丘の上先陣の居て遠花火

巻き上ぐる色あせしまま秋簾

一列に学校帰り鬨雲 岡 元枝

台風の来ぬ間の一斉下校かな

大花火消えてまたたく熱海の灯 坂本具子

テールに小さき向日葵旅の朝

秋風の吹き抜けて行く操舵室

春日和バギーに埋まるエレベーター 柴田雅春

雉鳩のひたとどまる花曇

花楓石橋渡る六義園

帰省子の思はぬ背丈上がり口 長野高朋

熱戦のあとの静寂や大夕焼

空蟬の風に飛び行く散歩道

一斉にマンション灯る夏の宵 豊 美佐子

老二人コンビニに買ふちらし鮓

熱帯夜警戒アラート出づるまま

遠花火高層ビルの隙間より 横浜 豊 美佐子

たつぷりと鉢に水やる夏夕べ

旱天の慈雨とならざる午後雨

朝顔の一番咲きに日の射せり 川崎 横山ユキ子

衿開けてゆるゆると着る秋の服

秋草の杖の丈越す更地かな

3D作る丸椅子星月夜 茅ヶ崎 久保田富士子

茄子の牛少し小太り夫迎ふ

野分だつ吹かれどほしの白蝶草 伊勢原 山本カツ子

蟬しぐれ息整へて坂上がる

野萱草水面に雲を走らせて

砂浜に声わき上がる西瓜割り

街路樹の百日紅咲く街若し 松田 古谷悠紀子

山奥に色を散らせり遠花火

蟬鳴くや命のうたを切れ切れに

師の声やそは青蔦の遊び蔓 静岡 飯田優子

早苗饗の御強の桶を囲みをり

幼子の作る白玉凸と凹

てかてかの撫牛の尻秋茄子 伊東 文恵

社務所より珈琲の香や菊日和

○下がり目の鍔絵の天女月今宵

御来光眼下に浮かぶ駿河湾 静岡 海野俊彦

波となり鯛の声押し寄せぬ

山里を受け継ぐ子らの盆踊

ある物で夕餉作りて敗戦忌

秋澄みて黒鍵連打の調律師

白粉花友の家へと歩く道

夫遺す鳥獣戯画の秋扇

風揺らす葉陰に青き栗の毬

法師蟬朝の網戸に鳴き通し

無患子の山荘の庭覆ひたり

吾亦紅みくじ見せ合ふ女学生

秋草に埋もれ社の道祖神

円墳を囲んで鳴けり法師蟬

公園の時計の狂ひ秋暑し

初鴨の岩に上りて羽繕ひ

日盛の人影まばら紺屋町

朝涼や鳩止まりたる千木の先

片蔭にそつと取り出す歩数計

○紫蘇の葉を洗ふや匂ひ掻き混ぜて

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

筑地裕子

交番の前の向日葵整列す

無花果の熟るるを風の知らせをり

月見豆押し出す指の絶え間なく

八月や渡り廊下の忘れ傘

防空壕へ逃げ込む夢や終戦日

背伸びしてゑ水遣る釣忍

荒れ庭や鉄砲百合の丈高き

おぼつかぬ歩みの老女原爆忌

角皿をはみ出してをり初秋刀魚

今年米届くや友の抱へ来て

竿灯の倒るや蠟の匂ひ満つ

宵宮の鉦の音里に飴して

富士仰ぎ深呼吸する今朝の秋

川音の近くに聞こゆ秋の色

蜻蛉の番水面を掠めたり

○炊き立ての白米の湯気終戦日

富士隠す川霧立てり忍野池

桃色の魅菓子の重さ敗戦忌

青波の登呂田を渡る稲穂の香

銚子の筆の薄れや秋ともし

内藤允昭

中澤祐一

永田公香

野崎浩子

長谷川洋子

松永博子

東海道一九生家に柿落つる 静岡 矢野喜久江

爽やかやゆるりと廻る鯉の群

秋暑し音たてて屋根外しをり

墓参り母の歩幅に合はせけり 掛川

ピザ匂ふ宿場に萩の花零る

すいつちよの髭を振るへる靴の中

青嵐帰宅の子らの背を押せり 川崎

空蟬や乾きしシャツの袖口に

百日紅の零れ継ぎたり慰霊の碑

護摩木爆ぜ十日まゐりの焰の香 金沢

十日まゐり抜け来て茶屋の膳につく

白波の風に追はるる晩夏かな

利己主義を振り翳す国はたた神

連発の花火の照らす夫の顔

手に余る礼状一筆処暑の朝

人去りて別れも言へぬ晩夏かな

日めぐりに今日の残暑も終はりけり

亡き父のそばに咲きをり彼岸花

雀やも声かすれたる夏の朝

草むらの殊に匂へる夏蓬

鈴木美由紀

鈴木裕一

井端久子

上野富貴子

北野陽子

新出祐子

仲よきは美しきかな盆の客

川蟬の背きらめきつ窓過ぐる 金沢 新出 祐子

声たてて草を次々稲雀

石段の脇うす紅のまんじゆさげ

流星や太古のひかり胸もとに

霊峰の水をくぐりて新豆腐

○秋祭半紙はみ出す祝文字

○人声の遠のく水辺牛蛙

砂浜の深き靴跡夏の果

初嵐オリープの葉のひるがへる

朝日浴び塩辛蜻蛉池めぐる

遠目にも色鮮やかや凌霄花

朝焼や濁声で啼く群鴉

亡き人を見送るみ空秋茜

行合ひの空眺めつつ走り蕎麦

秋の蝶片翅野路に遣しをり

死守したき戦なき世や断腸花

戦没の父と語るや終戦日

夏の朝駆除の青虫ふつかふか

かほく

能任 康子

○バケツ持ちゆづり合ふ道墓参

瓦師の炎天の屋根臆せず

能登人を泣かす極暑と豪雨かな

ゆらゆらと上るランタン秋の風 白山

待ち侘びし初秋の風に深呼吸

鶉の忙しき声に空見上げ

炎えて美しき鶏頭このむ母なりき

秋の蝶透けたる日差し存分に

秋薔薇の花びらのふち色深む

葦の花おほふ湖畔の舳ひ船 敦賀

新涼の森に魁夷の白馬かな

文机に辞書と鉛筆秋隣

兄ちゃんの太鼓轟く石取祭 四日市

熱帯夜オンザロックの酔ひ早し

○片蔭に信号待ちの野猿かな

秋水に映る金閣眩しめり 奈良

森奥へ誘ふやうに時計草

ざくざくと鱧の骨切り出刃の先

雑踏の中でつなぐ手夏祭 徳島

南無大師唱へ流灯浄土へと

林 早苗

鶴尾 正江

ばてぬやう鰻頬張る夕餉かな 徳島 山本晴美

二重三重しばし見とるる盆の月

夕暮れて汗にまみるる球児かな

炒飯の具材に庭の夏野菜

川うづめ千の光や流灯会

窓開けて処暑の夜風を浴びにけり

鉢植えを上下左右や鬼やんま 松山

玉を解く芭蕉の空に胸を張る

水打つや軽トラックの往來に

夏蝶の影を追ふ子の踊る足 福岡

帰省子と囲む食卓まづ一杯

新しき墓の見学花木権

原爆忌テレビの声に黙禱す

終戦日未來へつなぐ鼓動かな

心和む友より届く残暑見舞

○玄関の盛り塩溶くる暑さかな 大宰府

燕の子読み返したる母子手帳

蟬時雨鳴き尽くしたる朝まだき

十二種の豆腐づくしや暑氣払 那珂川

○浮世絵の団扇の中にドラえもん 高山ひさ子

墓じまひなどの話も盆祭

落蟬や枝に戻せばじじと鳴き 門川 請関ゆかり

○通学も空調服の残暑かな

露天風呂酌み交はしたる月見酒

棟梁の玄能上ぐる玉の汗 国富

夏空の飛行機雲の南方へ

熱帯夜夜行列車の一人旅

裏路地の朱色のたわみ花カンナ 那珂

白鷺に空の青さの極まりぬ

故郷の磯のかをりの夕端居

新涼の木洩れ日粗き慰霊塔

○稲妻や学徒少女の裁縫箱

小桜の塔をこぼるる秋螢

供華に足す母の小庭の草の花

凜々と野の白菊や折りの手

月影や猫の集まるほまち畑

初盆へ先づは煙草を供へたり 真野

○友來る猪畏のこと基地のこと

出船待つ秋夕焼の木椅子かな

泡立草ひしめく黄色背比べ ベリ

核廃絶の署名をしたり原爆忌 森尾

大鴉夕焼雲を裂きにけり 舞

万象作品の佳句

江見悦子

大声に返す大声入道雲 佐倉 鈴木隆久

句柄の大きな明るい句。「入道雲」という季語に久しぶりに出会った。高く盛り上がって頂きが丸く、大入道のように見える積乱雲のことで「雲の峰」と同意。大入道は妖怪の一種で昔から人々に親しまれてきた。夏空にわき上がる入道雲の下、大声のやりとりが響く。夏を謳歌する命の迸りを詠み、気宇壮大な句となった。季語「入道雲」が成功した。

道端の草々に問ふ敗戦忌 市川 奥澤よし江

8月15日の敗戦忌を詠んだ。「問ふ」は単に「たずねる」ではなく「といただす」という強い意味に取りたい。満州事変から太平洋戦争終結までの約15年間、日本の対外戦争の戦死者は軍人・軍属が約230万人、民間人が80万人とされている。無辜の民が何故犠牲にならねばいけなかったのか、戦争をやめることが何故出来なかったのか。戦後80年の今年、このいきどおろしい思いを表現している。「草々」から、人民を草にたとえていう語「民草」を連想した。

庭草のいのちあふるる子規忌かな 焼津 小梁洋子

正岡子規の忌日は9月19日。ガラスの入った六畳の病間から、子規は庭の草花を楽しんだ。「小園の記」(明31、10月「ホトトギス」)にはこんな文章がある。「病いよいよつりの

て足立たず門を出づる能はざるに至りし今小園は余が天地にして草花は余が唯一の詩料となりぬ」

作者は、眼前に旺盛に茂っている庭草に、子規の愛した糸瓜の下がる庭を思い子規に思いを馳せている。

反芻の麒麟の涎いわし雲 小松島 田上幸子

草食性の麒麟は、胃を4つもつ反芻動物。動物園の檻の中で口をもぐもぐ動かしている姿をよく見かける。作者はその涎まで見届けている。陸上の動物の中で最も背の高い麒麟がかつて自由に生きていた時、草原の上空には今日と同じ爽やかないわし雲が広がっていたはずだ。作者は明るい情景の裏側にある麒麟の哀しみを想像し共感している。

ぎゅうぎゅうのリユック仰け反る残暑かな 柏 村田由美子

リユックにぎゅうぎゅうに詰め込んだのは、買い込んだ果物か野菜か。まさか買い出しの米ではないだろうが、リユックを背負って立ち上がろうとすると仰け反ってしまう。暑さの中、こんなに重いものを運ぶことになるのか、という慨嘆。そんな残暑の捉え方が面白い。

秋の雲防霜ファンの中からと 静岡 杉田義則

「防霜ファン」とは、農作物に霜の被害(霜害)が及ぶことを防ぐ目的で設置される送風機。主に茶畑や果樹園で使われ、設定温度より気温が下がると自動で回るようにセットされている。「からからと」から、まだ作動してはいないのだろう。秋風にわびしく鳴る音には秋の寂しさが色濃い。

玻璃厚き六角堂へ夏の浪 三鷹 高尾早弓

「六角堂」は茨城県五浦に岡倉天心が建てた六角形の建物。

2011年の東北地方太平洋沖地震の津波のために消失したが、その後修復された。海に突き出す岩に建ち、広さはわずかに四畳半ほど、海側に玻璃窓が設けられている。「玻璃厚き」に、豪快に砕け散る夏の浪に向き合う六角堂が見え、堂々たる句になった。

日焼の子肩より脱皮はじまりぬ 芳賀 福武幸子

「脱皮」が面白かった。たつぷりと遊んで日焼けした子の肩から皮がむけ始めた。面白がって剥けている内に一皮むけてきれいな肌になる訳だが、それは新しく生まれ変わることもある。日焼の子への応援歌である。

通院と家事のひと日や蟬しぐれ 松戸 渡辺洋子

よく分かる素直な句。様々な雑事を含む家事のかたわら、自身の通院も加わって忙しい一日が終わる。ほっと一息ついているところに「蟬しぐれ」が聞こえて来た。日常の暮しの句読点、しばしの休憩である。

母の香の香水瓶にうすき塵 三 圃 植村康子

鏡台に置かれた香水瓶に塵がうつすらと積っている。まだ少し香水が残っている。時折お母様がまもっていた香水の香りを思い出した作者。「うすき塵」からお母様はご入院中なのか、長い不在であることが分かる。視覚と嗅覚が結んだしつとりした母恋の句となった。投句が初めての方、どうぞ「多作多捨」の精神で作句を続けて下さい。

下がり目の鍔絵の天女月今宵 静岡 伊東文恵

「鍔絵」は、左官職人が漆喰の壁に鍔を使って描いた絵。古い町並みに残る土蔵や戸袋に見られ、伊豆の松崎町や宇佐

市安心院などが知られる。仲秋の名月の夜、色鮮やかな鍔絵の天女の下がり目に目を留めた作者。天女も又名月を楽しんでいるような、俳味のある面白い句となった。

片陰に信号待ちの野猿かな 四 昂 藤原善明

「野猿」とあるので、山から下りて来た猿だろう。山里を貫く街道の信号に猿の姿を見つけた作者。猿もこの暑さには辟易しているのだろう。ちょうど日陰になっている場所だ。それにしても交通ルールを守っているかのような猿の姿は愉快だ。そんな作者の思いが伝わる。人間世界との関係もこの程度に終わってくれば良いのだが。

通学も空調服の残暑かな 門川 請関ゆかり

「空調服」とは主に屋外の作業用に作られたもの。服の内部に空調が組み込まれていて。一定の気温を超えると作動して冷たい空気が吹き出すように設計されている。作者の住む地域では、生徒たちも空調服を身に付けているようだ。今年の残暑はまだまだ猛暑、あと暫くは使わざるを得ないのだろう。近年の残暑を活写している。

稲妻や学徒少女の裁縫箱 那 覇 辺野喜宝来

「学徒少女の裁縫箱」と作者が出会ったのは、沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」か。遺品として陳列されていた裁縫箱は爆風でゆがみ、色を失っている。かつては、はさみ、針糸、巻き尺等、こまごまとした道具が丁寧にしまわれていたに違いない。少女は最後まで身に付けていたのだろう。疑念を抱くことなく、懸命に行動した少女たちの健気さ言葉に失っている作者。折からの稲妻が心に響く。

「万象」句会一覧① (2025年12月現在)

	句会名	開催日時	会場	指導	幹事
1	万象・新中央	第4日・1時 (変更あり)	東京文化会館 (令8年4月まで)	悦子・文代 千久	久留島・南雲 小池 080-1297-6113
2	札幌	第1土・1時	道民活動センター	林 陽子	落合裕子 080-6098-3822
3	札幌北	第1水・12時半	篠路コミュニティーセンター	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
4	札幌北(吟行)	第3水	吟行地	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
5	札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子 011-707-2259
6	札幌円山	第2火・6時	円山商店	濱谷和代	北浦詩子 090-9085-4391
7	新潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	高橋ひろ	高野松風 070-2828-7962
8	河交	第3日・1時	新潟中地区公民館	高野松風	齋藤 信 090-1691-9859
9	佐野・みかも	第4火・1時	佐野城山記念館	亀田・加藤	阿部・義本 0283-23-0747
10	風車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子 0283-25-2155
11	昴	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	茂木弘子 090-4456-2204
12	新樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子 0282-62-5138
13	皐月・すずかけ	第1火・1時	佐野城山記念館	増田幸子	売野 緑 0283-25-2109
14	佐野合同吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子 0283-25-2155
15	二荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	阿久津勝利 028-662-8020
16	芳賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	阿久津勝利 大村かし子	福武幸子 028-678-0175
17	志木木犀	第2日・1時	志木ニュータウン東武集会所	中村千久	板垣陽子 048-465-7217
18	浦和	第3日・1時	大妻女子大学	中村千久	砂地宏子 0422-47-3402
19	千葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	たけし・郁代 英俊	古川・田中 04-7163-3962
20	つばき	第1日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子 047-462-3711
21	小金原	第2 第4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢田たけし	寿多映子 047-343-1788
22	成田	第1日・1時	都賀コミュニティーセンター	奥 太雅 大内佐奈枝	塗木翠雲 090-5753-9873
23	うすみ	第3月・1時	臼井ニコッ一会館	三屋英俊 横川良子	横川良子 043-487-2625

*記載事項に変更のあった場合は、総務の久留島(080-1297-6113)までご連絡ください。
次回は5月号に掲載します。

「万象」句会一覧② (2025年12月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
24	都 賀	第2日・1時	都賀コミュニティーセンター	三屋英俊 大月玲子	高田みや子 090-7011-6144
25	柏	第2日・12時	アミューゼ柏	山本とく江 内田郁代	内田郁代 047-163-6810
26	柏吟行	隔月 曜日不定	吟行地	山本とく江 内田郁代	当番制
27	東京俳句スクール	第2火・1時	高井戸地域区民センター	江見悦子	吉中・藤田 044-986-1667
28	成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	下嶽孝一	下嶽孝一 090-3540-7471
29	杜の会	第1水・1時	吟行地	南雲秀子	南雲秀子 042-946-5536
30	小松川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	長谷川・前川 03-3685-8754
31	横 浜	第2日・1時	かながわLプラザ	小林愛子	大久保進 044-333-1054
32	横浜洪福寺	第3金・正午	ほどがや地区センター	小林愛子	榎本文代 045-953-4246
33	保土ヶ谷	第2木・正午	西谷地区センター	小林愛子	星野信子 080-6505-0666
34	あさひ	第4火・正午	上白根コミュニティーセンター	榎本文代	後藤晴子 045-954-1519
35	金沢文庫	第3日・1時	谷津坂会館	大橋雅子	加藤和子 045-773-6961
36	戸塚品濃	第2月・1時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾 0467-32-6578
37	ミモザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代 045-953-4246
38	川 崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤宗正 新妻奎子	新妻奎子 044-573-9249
39	伊勢原	第4水・10時	中央公民館	吉中愛子 佐藤和子	佐藤和子 0463-93-3979
40	静岡青葉	第1日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
41	静岡 葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	萩野加壽子	石川裕子 054-282-8577
42	静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子 054-286-3719
43	静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭 054-282-1063
44	小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美	矢野喜久江 054-283-5216
45	登呂通信	月1回	(通信)	小川明美	本多ひとみ 054-335-5107
46	風の谷	第2金・1時半	北部生涯学習センター	小川明美	鈴木美由紀 090-9175-8598

「万象」句会一覧③ (2025年12月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
47	静岡放送俳句講座	最終土・10時	SBS 学苑	小川明美	本多ひとみ 054-335-5107
48	井 川	第4金・3時	井川学習交流館	大村峰子	宮崎知恵美 054-260-2355
49	満点会吟行	随時	吟行地	小川明美	松永博子 090-6331-5071
50	時雨窓	第3水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	杉田義則 054-261-2245
51	青田風	第4水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	長谷川洋子
52	なでしこ	第2水・10時	番町市民センター	望月敏男	田中秀幸 054-252-5295
53	季節風同人	4/8/12月 第1土・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	当番制
54	季節風吟行	年2回	吟行地	神田美穂子	当番制
55	富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌司 0545-63-5697
56	赤ペン	第1土・1時半	遊亀庵	荻野加壽子	荻野加壽子 054-262-2486
57	堅香子(通信)	毎月15日		神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
58	あかね	第1木・1時	四高記念館	井村・谷渡	伊藤・松井 076-239-2103
59	白 菊	第4水・1時	西光寺	中條睦子	伊藤美音子 076-239-2103
60	ふれあい	第1 第3水・1時半	コミュニティーセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝 0767-68-2187
61	敦 賀	第2金・1時	北公民館	齋田勝子 中村 優	中川雅月 090-2038-2444
62	まつかぜ	第4火・1時	北公民館	中村 優 齋田勝子	中川雅月 090-2038-2444
63	徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美 088-625-1500
64	芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小林愛子 (後日選)	宮田千恵子 092-861-4605
65	長崎鳴滝	第3日・1時	鳴滝西部公民館	丸本祥夫	永田美知子 095-822-8624
66	宮崎ひむか	第1土・11時	ホテルマリックスラグーン	中山 宣 中山芳教	鳥居達史 090-9406-8807
67	真南風	第1土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
68	ふうせん	第2土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
69	インシャラー	第4日・3時	インシャラー	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
70	ふうの吟行	第3日	朝から吟行後ふうにて句会	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086

万象この一年

1月26日、平成14年4月の「万象」創刊以来、結社の運営に大変尽力を頂いた内海良太名誉主宰が逝去されました。

「万象」の大黒柱として活躍されましたので、訃報に接し、同人・会員は深い悲しみと喪失感に打ちひしがれました。2月4日の告別式では、ご遺族の対応をいただき、多くの同人・会員が最後のお別れをすることが出来ました。

3月1日、「万象」創刊以来、「万象」の発展に尽力され、令和4年より同人会会長を務められた曾根満氏が逝去されました。

大会

「万象」全国俳句大会は、昨年に引き続きホテルグランドヒル市ヶ谷にて開催され、83名が参加。同人会総会は、昨年同様全国大会前に開催された。

「万象」誌

江見悦子主宰の「万象の窓」は12号で45回目。小林愛子名誉顧問の「風音散步」は12月号で37回目。要路同人と各地有名同時による「風音集」を一本化した。曾根満同人会会長に

代わり中條睦子同人会会長の作品を掲載。橋本清氏に寄稿を依頼している「万葉集」にたずねる抒情の源流」は12月号で28回目。俳人協会発行の「俳句カレンダー」への掲載句自註・鑑賞は、江見悦子2回（うち、一回は内海名誉主宰の句を鑑賞）、中村千久、今越みち子の3氏が寄稿した。江見悦子主宰による「同人作品の佳句15」、「万象作品の佳句」を連続掲載。「同人作品」、「万象作品」の選は、江見悦子主宰選となる。「新中央句会報」を連続掲載。「同人特別作品評」は3月号まで下嶽孝一、10月号から萩野加壽子が担当。「同人作品鑑賞」から名を変えた「佳句佳句しかじか」は、松原智津子、亀田やす子、沢辺たけし、榎本文代、神田美穂子、前田貴美子、が交代で担当。「珈琲ぶれいく」は中村千久編集長が継続担当。「同人会だより」は同人会役員による報告。「万象」オンライン同人句会結果報告は、同事務局の小池清晴が担当。パソコン、スマートフォン、タブレットで参加できることから、参加者を募り漸増。9月末現在約50名が登録済み。「万象ノオト」は会員中心の自由投稿の場で、地域性豊かな個性溢れる内容である。同人4名による自註「私のこの一句」は4月号から。「東西南北」は同人・会員に関わる句会の状況や他誌に掲載された句や句評、出版情報等を巻末に掲載している。「ルビィの小函」は、本誌作品中の難読語（句）の訓みを紹介し、会員に好評を得ている。

1月号 内海良太名誉主宰の（水飲んでさて獅子舞のうしろ脚）の短冊、名誉主宰作品は「初筑波」。江見悦子主宰の

（うすずみの豊旗雲やはや三日）の色紙。主宰作品は「天
辺の鷲」万象俳句会のキーワードは、昨年引き続き「氣
宇壮大に志を高く」。小林愛子名譽顧問は「風音集Ⅰ」「短
日」に7句。新春特別作品は、伊藤美音子の「フォルティ
ッシモ」15句。俳句カレンダー掲載句鑑賞（水飲んでさ
て獅子舞のうしろ脚 内海良太）を江見悦子が鑑賞 江見
悦子句集「砂時計」鑑賞（俳句界）より転載。「俳誌月
評」（俳誌「鴻」より転載）。「俳誌周遊」（俳誌「扉」より
転載）。「万象の窓」季語について2。「同人会だより」は、
令和7年を迎えて（万象同人会会長 曾根 満）

2月号 「万象の窓」「切れ」について1。倉谷紫龍句集鑑賞
「群青の湖」に寄せて、江見悦子・中者正機・鶴田勝子・
中村 優。「同人会だより」は同人会名簿作成について
大久保進。

3月号 謹告 内海良太名譽主宰の訃報（万象俳句会）
「万象の窓」「切れ」について2。「同人会だより」「万象」
オンライン同人句会の参加者募集（沢辺たけし）。「4月号
よりの模様替えについて（予告）編集部。

4月号 「万象の窓」さようなら良太先生。「同人会だより」
句会に思う（中條睦子）。同人作品鑑賞「佳句佳句しか
じか」（神田美穂子）。「私のこの一句」（同人4名の作品自
註）。編集部から「夢で見た選句の話」（中村千久編集長）。

5月号 「万象の窓」東京大空襲。「同人会だより」小さな吟
行句会（榎本文代）。内海良太名譽主宰を悼む（江見主
宰ほか12名）。内海良太の百句（編集部抄出）。「薄荷飴

日月譚」（中村千久）。温故知新（「俳句界」（2025年4
月号より）転載）（江見悦子）。

6月号 「万象の窓」俳人協会総会に参加して。
「万象」組織と業務分担（令和7年4月から）

主宰・発行人／江見悦子、名誉顧問／小林愛子、顧問／
福島せいぎ、柳澤宗正、編集人・編集長／中村千久、事業
担当・第24回全国俳句大会実行委員長／中村千久、月例同
人作品受付／榎本文代、万象作品受付／成瀬真紀子、「万
象会議」構成メンバーは江見悦子主宰、中村千久編集長、
総務担当者・久留島規子、会計担当者・松浦陵保、名簿担
当者・塗木翠雲、同人会代表（幹事長）内田郁代。

「万象」句会一覧。 第7回 中山純子記念俳句賞発表
正賞／伊藤美音子「白山に雪」、神田美穂子「極月の水」、
準賞／成瀬真紀子「白川郷」、佳作／下嶽孝一「おほぼこ
の花」、特別賞／今越みち子「初午」が受賞。「同人会だよ
り」会長就任ご挨拶（中條睦子）。曾根満氏を悼む（編集
部・神田美穂子・大村峰子）。内藤恵子氏を偲ぶ（南雲秀
子）。

7月号 「万象の窓」ばら二題。「同人会だより」富士市と葛
飾北斎の富嶽三十六景（神田美穂子）。「ノマ点」をめぐ
って」（中村千久編集長）。

8月号 「万象の窓」輪島の段駄羅 第23回「万象」新人賞
発表 松永博子。「同人会だより」幹事会報告（内田郁代）。
「中山純子記念俳句賞」の終了について（中條睦子）。「万
象」誌の校正基準となる「万象」における俳句作品の表

記について」(編集部)の保存版を配送時に封入。

9月号 「万象の窓」「しょうけい館」を訪ねて。「同人会

だより」「風」の師欣一・綾子の句碑(前田貴美子)。

10月号 「万象の窓」「省略」について1。「同人会だより」

オンライン同人句会の参加者募集。第23回万象俳句賞発

表 万象俳句賞/穂苺照子「尾を高く」、次点/辺野喜宝

来「一日の春野」、佳作/松永博子「京ことば」。「北から

南から」辺戸岬・みやらび句碑。

11月号 「万象の窓」省略について2。「同人会だより」おだ

やかな出来秋を(林 陽子)。令和7年「万象」新同人発

表、令和7年度全国俳句大会作品集(応募総数658句)

を合冊として巻末に掲載。

12月号 「万象の窓」日々新たに生きる「同人会だより」

俳縁(谷渡末枝)、小林愛子句集「くれのおも」鑑賞江見

悦子主宰、橋本清氏ほか、同人9名が寄稿「薄荷飴日月

譚」(中村千久) 句会一覽 「万象」この一年(大木茂)

句集・出版物

小林愛子名譽顧問 第三句集「くれのおも」

受賞

第7回中山純子記念俳句賞は18編の中から伊藤美音子、神田美穂子が受賞。準賞は成瀬真紀子、佳作は下嶽孝一、特別賞には今越みち子。

第23回万象俳句賞は、27編の応募の中から穂苺照子が受賞。

次点は辺野喜宝来、佳作は松永博子。

第23回「万象」新人賞は松永博子(静岡)が受賞。

新同人

松永 博子(静岡)、松井 宣夫(武蔵村山)

松田 好子(金沢)、入河 大河(松山)

奥澤よし江(市川)、井端 久子(金沢)

辺野喜宝来(那覇)

物故同人

謹んでご冥福をお祈り致します。

内藤 恵子さん (令和6年10月31日・東京) 88歳

河原 昭子さん (令和7年1月6日・津幡) 82歳

内海 良太さん (令和7年1月26日・佐倉) 86歳

曾根 満さん (令和7年3月1日・静岡) 84歳

大湾 宗弘さん (令和7年10月25日・那覇) 75歳

(大木 茂)

新中央句会報（9月例会）

令和7年9月28日（日）東京文化会館

（出席20名）

江見 悦子 主宰選

大山の水ごと掬ふ新豆腐 吉中愛子

糸瓜の水取る一滴を待ちゐたり 吉中愛子

雲映し風わたりゆく花野かな 中村千久

歩をゆるめ渡る神橋水の秋 大久保 進

寧^な楽は秋古りし葉舗に箱階段 中村千久

山裾を飛び火のごとく曼珠沙華 奥 太雅

蹲踞の水ふるはせて法師蟬 三屋英俊

新米の粥をふうふう離乳食 榎本文代

かなかなや生家に今も父の下駄 下嶽孝一

いつまでも売れぬすつぽん秋彼岸 久留島規子

④ 原つばへ園児ちりちり昼ちちろ 桔梗 純

⑤ 原つばへ園児ちりちり昼ちちろ 桔梗 純

「原つば」のA音、「ちりちり」「ちちろ」のI音の繰り返しの韻律がこの句の身上。野原に解き放たれた園児たちがでんでに散らばって好きな方向へ駆けて行く。静かになった草

原からは、蟋蟀の音が聞こえるばかり。久保田万太郎の（竹馬やいろはにほへとちりぢりに）を思い出した。

雲映し風わたりゆく花野かな 中村千久

高原の花野を眺めている作者。花野には雲の影が映り風が吹き渡って、秋の七草や吾亦紅、竜胆、松虫草などを揺らしている。共感を呼ぶ広々とした爽やかな景。二つの動詞の使用も自然で、「かな止め」の力を思った。

歩をゆるめ渡る神橋水の秋 大久保 進

「神橋」は、日光の大谷川だいやがわにかかる朱塗りの橋と取りたい。日光の社寺の入口であり、この橋を渡ると東照宮の参道が伸びる。現在の橋の姿は1636年の東照宮の大造替時、その後修理を重ねて今や世界遺産の文化財の一つとなっている。江戸時代、庶民は渡ることが許されず仮の橋を使っていたそうだ。今では有料で渡ることが出来る。さて作者は、この由緒ある橋に来て速度をゆるめた。来歴を知ってか知らずか、大谷川の流れる神橋一帯の荘厳さ、清らかさに心が動いたのだ。季語「水の秋」が生きている。

いつまでも売れぬすつぽん秋彼岸 久留島規子

すつぽんを売っているのはどんな場所だろう。大きな魚屋か、或いは祭の露店だろうか。生きたすつぽんが水槽の中で動いている様を想像した。そんなすつぽんに目を留めた作者。

どうして売れ残っているのか、秋彼岸だから殺生をしないと
いうことなのか、まだすっぽん鍋には早いせいなのか、そん
なことを思っている。すっぽんの姿が哀れでもあり、また滑
稽でもある。面白い句になった。

中村 千久 選

湧き上がる常念岳に白き虹	松浦陵保
大山の水ごと掬ふ新豆腐	吉中愛子
秋風やしづかに蝶の重なりぬ	榎本文代
犬蓼の花を離れぬ蜆蝶	江見悦子
ほつれ毛を直す指先秋の風	砂地宏子
流れ星待ちくたびれて眠りけり	砂地宏子
秋風の路地銭湯の桶の音	下嶽孝一
村芝居体育坐りの子供たち	松井宣夫
朝露や水子地蔵の眼になみだ	下嶽孝一
檻櫻纏ひ睨みを利かす案山子かな	塗木翠雲
⑧ かなかなや生家に今も父の下駄	下嶽孝一

⑧ かなかなや生家に今も父の下駄 下嶽孝一
久方ぶりに帰った「生家」、そこに「父の下駄」があるの
を見つけたのである。鼻緒の開き具合、齒の減り癖が懐かし

かっただろう。哀調を帯びた鯛の鳴き声が寄り添う一句。実
はこの句、女性の句だとばかり思ったら、作者はこの日絶好
調の下嶽さんだった。

秋風やしづかに蝶の重なりぬ 榎本文代

秋風の中を舞ふ二つの蝶の動きを追う作者である。二つの
蝶はやがて静かに翅を重ねた。交尾の体勢に入ったわけだが、
掲句からはそこで行われる蔽かともいふべき営みを感じられ
る。膝を揃え襟を正さねば。詠む人が詠むと、こんな美しい
句になるのだなあ。

大山の水ごと掬ふ新豆腐 吉中愛子

伊勢原市にある「大山」は、「雨降山」とも呼ばれてきた。
山中にも清らかな水の湧く場所がいくつもあり、そんな水を
使って「新豆腐」も作られるのだろう。豆腐屋の親爺の「水
ごと掬ふ」といふ動きを捉えた目がいい。いかにもこの土地
らしい。

榎本 文代 選

大山の水ごと掬ふ新豆腐	吉中愛子
糸瓜の水取る一滴を待ちゐたり	吉中愛子
花蕎麦の畑より湧けり群雀	南雲秀子
水底へ潜る鯉をり秋彼岸	星野信子

穂より株匂ひ鮮し 荊田道 吉中愛子

寧楽は秋古りし 葉舗に箱階段 中村千久

蹲踞の水ふるはせて 法師蟬 三屋英俊

山裾を飛び火のごとく 曼珠沙華 奥 太雅

踏むもまだ煙は吐かず おにふすべ 奥 太雅

いつまでも売れぬすつぽん 秋彼岸 久留島規子

⑥ 竹の春 野宮ののみやに旧る 黒鳥居 中村千久

⑦ 竹の春 野宮ののみやに旧る 黒鳥居 中村千久

野宮は、皇女もしくは女王が齋宮または齋院になる時、潔齋のために一年間こもる宮殿と広辞苑に載る。旧びた黒木の鳥居は歴史の重さである。それを受け止めているのは季語の「竹の春」。紅葉が始まる木々の中で、竹林の濃い緑は、やさしく柔らかく周囲の情趣を引き立ててくれている。

糸瓜の水取る一滴を待ちあたり 吉中愛子

糸瓜の水は去痰鎮咳の妙薬と言われ、根の方の切り口を瓶にさしておくで一昼夜で1リットル位取れるようである。その最初の一滴を待っているという。子規庵での作と聞いた。(をとといの糸瓜の水も取らざりき)は、子規絶筆のうちの一句である

山裾を飛び火のごとく 曼珠沙華 奥 太雅

群がり咲いてその辺りを真紅に彩っている曼珠沙華。「飛び火のごとく」で里山の景が一気に広がって見える。比喩が鮮やかに効いている句である。

今後の新中央句会の予定

▽12月の新中央句会は、会場の確保が出来ないため中止と致します。

▽1月25日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

〈お詫びと訂正〉

11月号に誤りがありました。お詫びして訂正致します。

P50上段9行目

(誤) 1968年より

(正) 1986年より

P50中段の俳句作品

(誤) 百日紅の中ありがたうこぼれた

(正) 百日紅の中ありがたうこぼれたり

(誤) とうすみや誰にも会はぬ窓を開

(正) とうすみや誰にも会はぬ窓を開け

俳句四季新人賞
受賞記念作品20句

山海和紀

俳句四季新人奨励賞
受賞記念作品20句

有瀬こうこ

田中木江

新人賞最終候補者
競詠5句

● 巻頭三句

伊藤伊那男／江崎紀和子

小杉伸一路／屋内修一

松岡隆子／伊藤環子

● 今月の筆

柴田鏡子／山下幸典

● 俳句と短歌の10作競詠

織田亮太郎＋千種創一

● 人と作品

衣川次郎『葱の青』

● 今月のハイライト

「花鳥」「白魚火」

「ににん」「羅羅」「むやし野」

重陽の節句吟行記

井上弘美

● 好評連載
成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、
俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語
イメージ辞典

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一

てのひらの江戸
― 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

石井隆司

たもとほる
俳句よもやま話

二ノ宮一雄

一望百里



2025年12月号

11月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東京都東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

第26回「俳句四季」全国俳句大会 俳句作品大募集

● 募集

2句1組(雑詠・未発表のもの)何組でも可

● 投句方法

「俳句四季」巻末の投句用紙または原稿用紙に作品・住所・
氏名・電話番号を明記。またはWEBの投句フォームから。
くわしくは「俳句四季」または東京四季出版HPをご覧ください。
(ご注意)投句後の修正、取り消し、発表前のお問い合わせには応じられません。



WEB投句はこちら

● 投句料

1組につき1000円

(現金書留・小為替・郵便振替・WEB投句はサイト内にて決済) 振替 00130-0-572839

● 締切

2026年2月2日(消印有効)

● 送り先

〒189-0013東京都東村山市栄町2-22-28 東京四季出版「全国俳句大会」係
電話 042-399-2180

● 大賞

1名 賞状・記念品・副賞20万円

優秀賞 2名 賞状・記念品・副賞5万円

佳作 6名 賞状・記念品・副賞1万円

● 浅井慎平・夏井いつき・富士真奈美賞

各1名

● 予選発表 「俳句四季」5月号

● 入選発表 「俳句四季」7月号

● 贈賞式 2026年7月7日(予定)

はればれと冬の噴水吹かれをり

（滝となる嬉しさに水躍りけり）という、子どもの絵日記を切り取ったような無垢で無邪気な句を残したのは飛高隆夫だった。私たちはどこかでこの「滝」に惹かれる気配がある。重力に逆らうことなく、落ちる水をそのままに楽しもうというのが日本人の心である。その一方、「噴水」は人工的に作り出されたものだ。自然の中に同じようなものを求めれば、一定周期で水蒸気や熱湯を噴き上げる間欠泉というものがあるが、「噴水」はあくまでも人の手によって広場や公園に設けられた装飾的な設備である。上から下へといふ自然の道理に抗おうとするところ、自然を征服しようとするところにいかにも西欧的な感じがある。

掲句にある「噴水」を見たのは上野公園だった。冬晴れの穏やかな日で、青空の下で勢いよく噴き上げられた水の穂が、冷たい北風に吹かれて飛沫を飛ばしていた。「はればれ」「冬」「噴水」「吹かれ」と、軽く爽やかな印象のある八行の頭韻を踏んだ一句になっている。特に頭韻を意識したわけではなかったが、この句はすつとやって来た。

歳時記にある「噴水」は、涼味を誘う夏の季語の一つだが、掲句の季語は「冬」で、冬青空の下に広がる公園の景色をただ切り取ったもの、ということになる。舌先に転がしてみたときの音の響きが、自分なりに気に入っている。

*ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

俳句

12月号
予告

11月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 正木ゆう子
作品21句 鈴木貞雄・対馬康子

遠景と近景

大特集

「総論」「景」の多角性「各論」俳句における遠景／遠景の名句／俳句における近景／近景の名句／番外編「中景句のすすめ」／吟行における着眼の意識

句集特集 坂本宮尾句集

『ゆるやかな距離』

好評連載

小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人
飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉
俳句の水脈・血脈……………角谷昌子

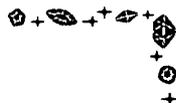
※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>



ルビーの小函 (12月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 6 蠅虎 (はえとりぐも)
- 7 旧る (ふる)
- 9 小抽斗 (こひきだし)
信楽狸 (しがらきだぬき)
- 11 抱瓶 (だちびん)
日照雨 (そばえ)
狭霧 (さぎり)
- 12 実玫瑰 (みはまなす)
轆馬 (ばんば)
- 13 木賊垣 (とくさがき)
- 15 擦れ (かすれ)
更待 (ふけまち)
白湯 (さゆ)
- 16 反故 (ほご)
- 17 拍手 (かしわで)
口遊ぶ (くちずさむ)
百日白 (ひゃくじつはく)
- 18 稲架掛け (はざかけ)
- 19 柘植 (つげ)
- 20 栖 (すみか)
- 21 昨夜 (よべ)
- 22 裂脰 (さきなます)
- 23 踳踳 (つくばい)
狗尾草 (えのころぐさ)
- 24 十団子 (とおだご)
椋鳥 (むく)
襖場 (みそぎば)
- 25 冷まじ (すさまじ)

- 25 殖ゆる (ふゆる)
- 26 資頭虚 (びんずる)
蠍 (さそり)
七半 (ナナハン)
醬 (ひしお)
- 27 祝詞 (のりと)
川門 (かわと)
項 (うなじ)
- 28 交尾びて (つるびて)
隠沼 (こもりぬ)
静寂 (しじま)
- 29 信夫 (しのぶ)
- 32 錫色 (ときいろ)
- 52 疎覚え (うろおぼえ)
仰け反る (のけぞる)
- 53 添水 (そうず)
虫集く (むしすだく)
- 55 郁子の実 (むべのみ)
- 58 白蝶草 (はくちょうそう)
早苗饗 (さなぶり)
御強 (おこわ)
無患子 (むくろじ)
- 59 忍野池 (おしのいけ)
銚介 (けいすけ) *芹沢銚介 (染色家)
- 60 濁声 (だみごえ)
誘ふ (いざなう)
- 71 檻襖 (ぼろ)
- 76 其中 (そのなか)

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰・小林愛子名誉顧問の句

「くちら」 10月号に

真夜の夢つむぐやからすうりの花 悦子

「初蝶」 10月号に

矢車菊ま青フアラオの棺の上 悦子

「たかなな」 10月号に

寺町の空の広さを初燕 悦子

「山繭」 10月号に

家刀自の古裂のてちやう窓若葉 悦子

真夜の夢つむぐやからすうりの花 悦子

「しろはえ」 10月号に

真夜の夢つむぐやからすうりの花 悦子

亡き人の気配そびらに夏の月 愛子

第64回俳人協会全国俳句大会 入選句

上田日差子 選

手を触れてみたく寝釈迦の臉かな 杉澤 修

徳田千鶴子 選

おはぐろを弾ませ沼の遊び蔓 杉澤 修

喉を焼く電気ブランや三鬼の忌 杉澤 修

中原道夫・松岡隆子 選

虫追ひの列に加はる野球の子 杉澤 修

白濱一羊・高田正子 選

頬づえをついて金魚と見つめ合ふ 神田美穂子

角谷昌子 選

雪降るやポストは地震に反り返り 井端久子

仲村青彦 選

紙漉きの村を貫く冬の川 井端久子

谷口智行 選

朝露にしづむ一村草雲雀 豊田高子

10月13日付毎日新聞「毎日俳壇」に小池清晴氏の句が小川軽舟選に

首相辞す丑三つ時の月赤し

首相辞す丑三つ時の月赤し

「私の吟行地」

(南雲秀子)

私の住む所沢市から車で二時間位で東秩父村と言う所に着きます。ある時ふと立ち寄ったのがきっかけでとても気に入りました。埼玉で只一つの村とか。山と川の田園地帯ですが、初夏の丘一面に真赤なポピーが咲きます。道の駅もあり、その一角に和紙作りをしていた古民家が残り、今も近くに和紙工房があります。又、峠を越えた秩父市にはそばの里と呼ばれる場所があり、一面の花そば畑が広がり目の前に武甲山が聳え立つビューポイントです。

和紙の里ぬけて秩父のポピー畑

そばの花見に来て並ぶ二八蕎麦

江戸の花園 向島百花園探訪2(小池清晴)

今年も九月中頃に向島百花園を訪ねてみた。面長の夕顔が置かれた受付で入場料70円(65歳以上)を支払い、園内に入るとそこは秋たけなわ。希少種の朝顔の鉢がずらりと並び園内奥へ、糸瓜棚からは糸瓜・夕顔・瓢箪がぶら下がり、まわりには萩・世・女郎花・芙蓉・桔梗・彼岸花・水引、と数えれば切りがなく、歳時記の植物を具現化している場所ではないかとさえ思わせる。

元々俳句の句碑や立札はあったのだが、今年はその数が増えている。ここは俳句好きの方に恰好の場所なのかもしれない。いくつかご紹介しよう。

白露もこぼさぬ萩のうねりかな 芭蕉

葉もなしに何をあわてて曼珠沙華 芭蕉

枝ぶりの日ごとにはる芙蓉かな 芭蕉

雲をりをり人をやすめる月見かな 芭蕉

われをつれて我影帰る月夜かな 素堂

名月や叩かば散らん萩の門子規

垣の外に萩咲うせけり百花園子規

雨風の中に立ちけり女郎花 来山

其中に金鈴をふる虫一つ 虚子

衰へし野分に鴉一羽飛び 虚子

939-0364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏名	住所

〈通信欄〉

編集後記

▽酷暑の夏の余韻を引きずった秋が足早に過ぎ去り、全国大会が終わる頃には冬の気配がやって来ました。編集部ではすでに令和8年新年号の準備が始まっています。季節の装を味わう余裕のないままに過ぎたこの一年。世相は更に慌ただしく過ぎました。来年は創刊25周年を迎えます。

(千久)

▽10月の全国俳句大会を無事に終えられ、ご出席の皆様、関係者の皆様、そして、新しい出会いや、貴重な経験に心より感謝申し上げます。編集担当として今年一年を顧みれば、反省すること頻りです。来年はまた初心に返り、真摯に務めて参ります。

(規子)

▽带状疱疹の痛さの中でこの原稿を書いている。焼火箸を身体に押し付けられるような感覚である。休養と栄養が必要だというのだが、痛くて横になれないのだからどうしようもない。自分だけは大丈夫という根拠の無い過信が招いた結果かもしれない。ぜひワクチン接種をお勧めします。

(清晴)

▽新中央句会の会場近くの上野公園は、たくさんの美術館、博物館などがあります。今回初めて国際子ども図書館に行ってみました。1906年に帝國図書館として建設された建物を保存再利用し、東京都の歴史的建造物に選定されています。外観も蔵書も見応え十分です。これからもいろいろな所に出かけたいと思います。

(久美子)

▽9月、東大和市にある高木神社の秋祭りを見学しに行きました。祭りのメインは無形文化財に指定されている獅子舞。越後獅子のような出で立ちに雌一頭、雄二頭、狐一頭の組合せ、演目は二頭の雄が一頭のメスを争い、相撲で勝負となります。しかし負けた方が納得せず行司役の狐を責める姿は、魔物界のパワハラでした。

(宣夫)

▽晩秋の魚沼へ行ってきた。新米は塩沢産が人気が高い。宿で新米を食べ始めると箸が止まらない。八海山の初冠雪や山間の棚田を眺める好機に恵まれながら、素直に食欲の煩惱に従う。

(みや子)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二,〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・1033581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 十二月号

第二十四巻 第九号

通巻 第二八五号

令和七年十二月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-10072 東京都杉並区高井戸東一-三-166 603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

万象 第二十四卷 第九号 (通卷二八五号)

平成十四年十二月十三日 第三種郵便物認可
令和七年十二月一日発行 (毎月一回一日発行)